共に和平を圖り速かに其の方案を實現せんことを望んでやまぬ。救亡復興は實に之に基くものである。耿々たる熱血の衷情、希くば清鑑されよ。

日本政府に於ては右の汪兆銘の歴史的宣言に呼應して、其の新中央政府に對する帝國政府の方針を明確にし且つ事變處理方針を闡明し、對立抗爭を矯めて仁愛光被の平和を確立するは我が肇國の精神を顯現する所以にして東亞新秩序の理念も玆に淵源する。宜しく各國家夫々安住の處を得、近隣相携へて各其の本然の特質を尊重し相共に興隆發展し得る道に就くべきを述べ、滿幅の支援を惜まぬことを聲明した。そして阿部大將が特命全權大使として南京へ派遣された。

斯くて汪政權が生れた。しかし之が生れたからとて直ちに休戰となり和平が出來るものではない。此の事變は蔣介石の軍隊が戈を收めなければ決して終るものではない。蔣政權に屬する二百萬の軍隊が日本並に汪政權に戈を向けて來る內は眞の東洋平和は實現しない。

然るに重慶には反省の色がない。彼等は汪政權の成立を妨害するために躍起となり、汪等を漢奸と稱して逮捕令を出し、汪の首に百萬元の賞金を懸け、特にテロを上海に潛入せしめて汪一派の暗殺を企て、汪夫妻の藁人形を作りて衆人環視の中で鞭罵したる後火葬に附する等の馬鹿げた眞似までやつた。此のやうな頑迷な蔣派であれば到底和平親日の態度に向き換へることは難かしい。殊に米國あたりは眞先きに汪政權不承認の聲明を出した。其の聲明の要旨は、日本が第三國の勢力を支那から追ひ出す爲めに汪の新政府を創つたのだと云ふのである。老獪な英國は米國ほどにハッキリせず例の不即不離の態度に出でた。

ば到底和平親日の態度に向き換へることは難かしい。殊に米國あたりは眞先きに汪政權不承認の聲明を出した。其の聲明の要旨は、日本が第三國の勢力を支那から追ひ出す爲めに汪の新政府を創つたのだと云ふのである。老獪な英國は米國ほどにハッキリせず例の不即不離の態度に出でた。

蔣介石は此の汪政權に對し次の要旨の演說を試みた。

「歷史を顧みるに、我等は國家の衰弱は怕るゝに足りないが正邪の混淆、是非の不明を最も惧れる。歷代亡國の原因は士大夫が廉恥を喪失するばかりでなく、一般社會が正邪を混淆し、黑白を分たず、人心麻痺して知らず識らず滅亡に陷るのである。

予は歷史を讀み、金の兵が渡河する時「南朝人無し矣」とあるを最も意義深き言葉に感じた。蓋し南朝人なきにあらず、只正氣銷沈し、正義喪亡し、爲めに人は人たらずして敵の侵入に委せたのである。故に最も緊要なるは民族正氣の發揚である、國家正義の昌明である。春秋の義を明かにし夷夏の別を嚴にせねばならぬ。汪兆銘の僞政府は亡國を以て和平の妄想をなし、黑白を顚倒して人心を搖亂する。故に我等は是非を明かにし正邪の別を立てねばならぬ。正氣苟くも存し、正義昌明であるならば如何なる敵と雖も中國を亡ぼし得るものではない。

日本の政治家は中國民衆の現在の精神力の偉大を認識してゐない。日本人は明末の歷史を研究することを知つてはゐるが、中華民國の成立の歷史は知つてゐない。清朝が如何にして滅亡したかを知らない。民國は如何にして打ち建てられたか、現在我等中國の時代精神、また三民主義の力量が如何なるものであるかなどは到底思ひも及ばないであらう。今彼は阿部大將を派遣して一種の朝鮮總督としようとしてゐる。此のやうな

侮辱は必然的に我等の强靱なる民族意識を格段と煽るものであつて、日本閥が愈々猖狂兇狡なれば、我等の勝利の前途はいよ〳〵近いのである。

我等の國家は尙ほ未だ獨立平等の地位に到達せず。敵人は未だ驅逐し得ず、建國未だ成功せず、人民は尙ほ痛苦を受け國家は尙ほ屈辱を受けてゐる狀態である。故に吾等は事變以來の風雨同舟、患難相濟の經過を回想し、今後十倍、二十倍の艱苦の日を豫想して一致救國に起たねばならぬ云々」。

蔣介石にして斯くある以上、膺懲の戈は之を緩める譯には行かぬ。さて其の鋭鋒の向ける所は何處か。昨冬から年頭にかけての彼の冬季作戰が大損害を以て失敗し其の瘡痍未だ癒えずして補充整備に汲々としてゐる。我軍は敵の其の回復再起に先だち之を擊碎すべく敵の最も痛痒を感ずる方面に向つて强擊の作戰を進めた。其處は漢口の上流約百五十里、重慶の下流約百八十里の宜昌の要衝である。

第五節　宜昌作戰（五月—六月）

宜昌は重慶の表玄關にあたる重要陣地である上に、今や彼等が命脈を保つべき輸血路である赤色ルート、長江、ビルマ——雲南ルートの防衞線でもある。されば敵は此處を第五戰區と稱し、老雄李宗仁を將とし初めから兵備を堅固にしてゐた。

然るに我が軍は一昨年漢口占領後、昨年の五月に一度、敵に襄東作戰で大打擊を與へただけで、爾後は鳴りを

ひそめてゐた。それを蔣介石は例によつて、日本軍は最早や、それ以上進んで來る餘力が無いものとの誤つた推

ビルマ――雲南ルートの防衛線である。されば敵は此處を第五戰區と稱して
を堅固にしてゐた。
然るに我が軍は一昨年漢口占領後、昨年の五月に一度、敵に襄東作戰で大打擊を與へただけで、爾後は鳴りを

ひそめてゐた。それを蔣介石は例によつて、日本軍は最早や、それ以上進んで來る餘力が無いものとの誤つた推測を立て、續々と兵力を增加して來た。若し今二、三箇月も放つて置いたら、敵の兵備が非常に充實して來ることが、偵察の結果判つたので、日本軍としては其の前に、眞向から敵を微塵に叩き潰して置くのを得策とした。

それと同時に、丁度其の頃、汪兆銘の新政權が成立したので、支那の民衆をそれに歸服させ、其の勢力の及ぶ範圍を擴大して置いてやる必要もあつたのだ。

【敵情】 先づ地形を概說するであらう。此の作戰の行はれたのは主として湖北省の襄陽道である。襄陽道の中心を南北に縱斷してゐるのが漢水で別名を襄河とも呼ばれてゐる。隨つて河の東が襄東、西が襄西であるのは云ふまでもない。

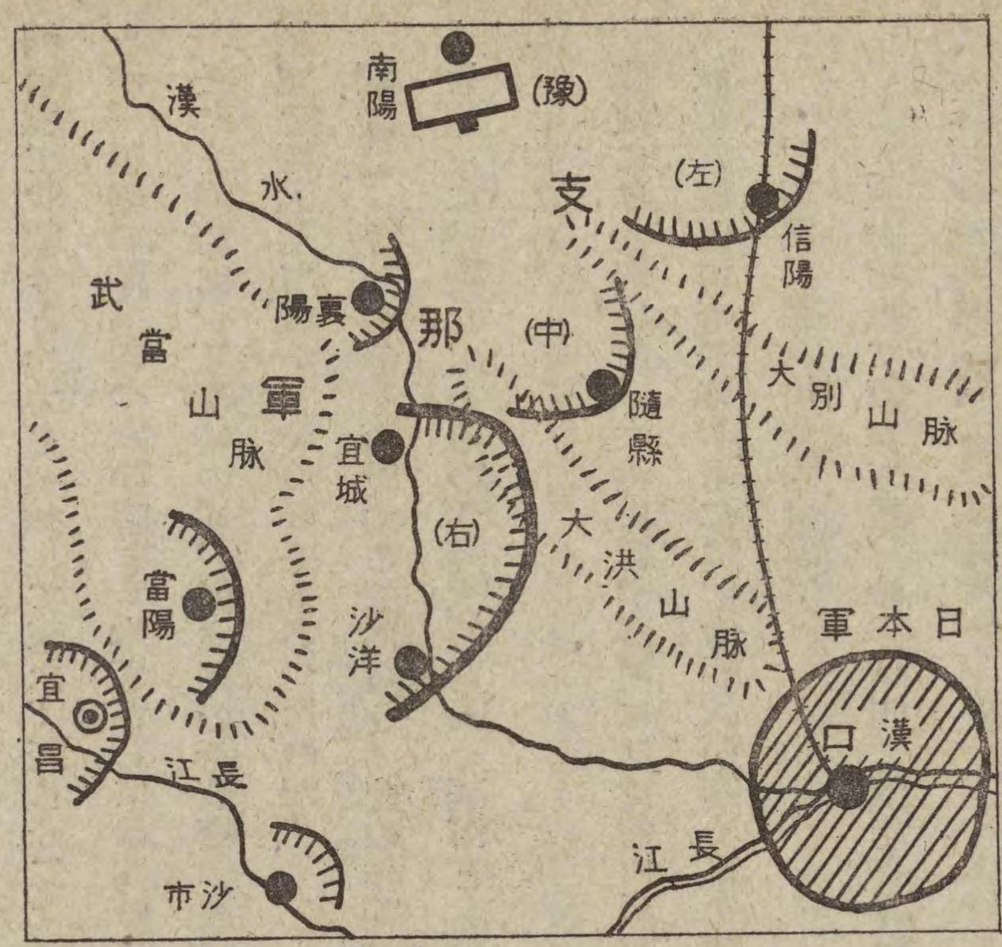
襄東には大別山脈、大洪山脈、襄西には武當山脈がある。

敵第五戰區司令長官李宗仁は、大要次の如く軍を配置した。

一、右翼兵團（司令張自忠）
　主力を以て概ね宜城、沙洋鎭間で漢水右岸を、一部を以て左岸安陸北方山地を固守し、
二、中央兵團（司令黃琪翔）
　主として隨縣附近で大洪山脈東麓地區
三、左翼兵團（司令孫連仲）

主として京漢線上の信陽北方及び其の西方附近で大別山脈北麓地區

四、豫備隊（司令湯恩伯）



宜昌作戰前の配備

南陽附近

五、江防隊（司令郭懺）

揚子江沿岸の地區

右は主として襄東方面の配備であるが、襄西にありては前記右翼兵團の後方當陽の線並に宜昌には堅固なる防衛の陣地ありて三段乃至四段の構へになつてゐた。其の兵力總計約五十個師、五十萬と見られた。

其一　漢水左岸の擊滅戰（五月一日―五月二十二日）

漢水左岸の擊滅戰とは襄東地區の敵に對する擊滅戰のことで、凡そ此の位我が思ふ壺にはまつた痛快な戰は珍らしいのである。

即ち我軍は敵の何分の一にも足りない寡兵を以て何十萬の敵大軍を三方面より包圍攻擊して大打擊を與へたる

な戰は珍らしいのである。

戰のことで、凡そ此の位我が思ふ壺にはまつた痛快

即ち我軍は敵の何分の一にも足りない寡兵を以て何十萬の敵大軍を三方面より包圍攻擊して大打擊を與へたる後、颯と手を引き、それに附け込んで來た敵を充分引き寄せ、頃合を見計らひ、急に反轉逆擊して之を袋叩きしたのであるから、實に快絶極まるものである。此のやうなことはよく擊劍や角力に見る手であつて、我が作戰の妙を現はしたものである。

それであるから此の方面の作戰は最初の包圍攻擊戰と其の次の反擊戰との二つに分かれるのである。

【其一　包圍攻擊戰（五月一日—九日）**】**　我軍は其の司令部を應城に進め、大要軍を甲、乙、丙の三大部隊に分け所謂三道並び進んで棗陽附近の敵を捕捉殲滅しようとの大仕掛である。

即ち甲部隊をば信陽附近から泌陽、泚源方面に、乙部隊をば隨縣附近から棗陽方面に、丙部隊をば安陸附近から新野方面に進ましめたのである。其の作戰正面は約五十里で此の間に大洪山、大別山々系の波が起伏してゐたから、軍隊の勞苦は固より之を指揮する統帥部の苦心の程は察するに餘りある。

我軍に於ては作戰上先づ右翼の甲部隊と左翼の丙部隊との二軍を進め、中央の乙部隊をばそれより三日後れて出發させたのである。斯う云ふ所に作戰の妙を發見することが出來る。

五月一日右翼甲部隊は數縱隊に分かれ信陽——明港間の地區より前進を起し、山地に據る敵を攻擊々破しつつ、五月三日には早や竹溝から桐柏東方小林店の線に達し、左翼丙部隊も數縱隊を以て安陸附近を出發し行く行く敵を擊破し、同三日には馬家集の線にまで達した。

五月四日に至るや、滿を持して待機中なりし中央乙部隊は猛然起つて隨縣附近より前進し、堅固なる山地の陣地に據る敵を驅逐し、其の日の中に高城鎭、均川店の線に達した。兩翼の甲、丙、兩部隊も亦前進したので、此の五月四日に於ける我軍の戰線は大凡次のやうな狀態であつた。

泌陽東方から桐柏東端を經て高城鎭、均川店、田家集、流水港に亙る線であつて、此の間各部隊は山岳によつて隔絶してゐるとは云へ、大體に於て順當な戰線を形成してゐたのである。

五月五日には泌陽、桐柏、安居、新街の線に、同七日には北は泚源より棗陽東方を經て双溝鎭に亙り凹字形の線を占めて敵を取り卷いたのである。かうなるまでには敵の損害は大したものであつた。敵は各方面共に統制なく隨つて敗れ隨つて走り或は山間に逃避四散し、或は北に西に彷徨して其の行く所に昏迷してゐた。南陽附近に在つた湯恩伯軍は一時は有力なる部隊を以て北方より日本軍の右側面を擊たんとしたが、我が勢威に恐れてか躊躇して敢て積極的行動にも出でず、日本軍の猛進を傍觀の體であつた。唯張自忠軍の一部は日本軍の左翼丙部隊の北進に伴ひ宜城南方より漢水を渡りて日本軍の左側背を攻擊せんとするものゝやうであつたが、是れ又未だ積極的行動に出づる模樣がない。

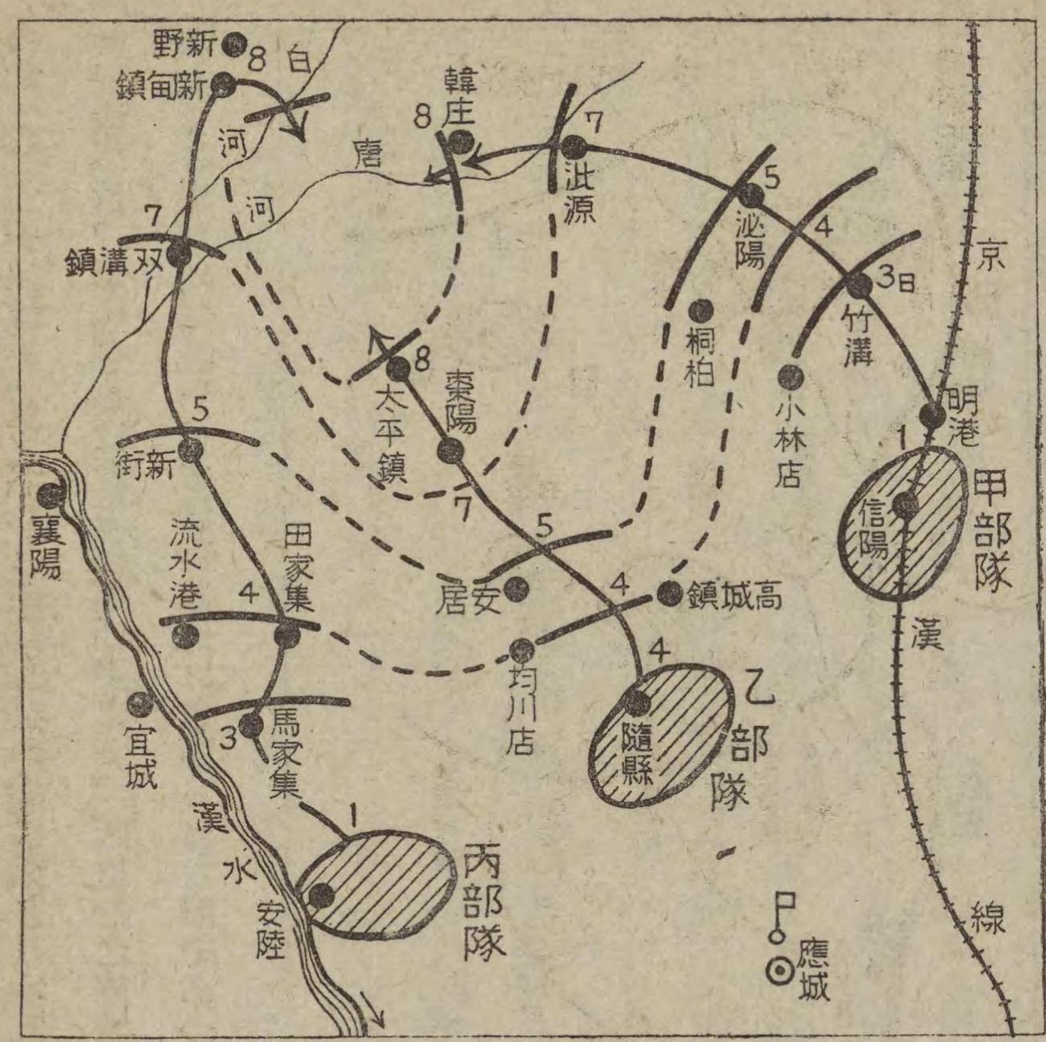
其の間に日本軍はグン〳〵と包圍圈を縮め五月八日には中央の乙部隊は棗陽を陷れ、右翼の甲部隊は韓庄に、左翼の丙部隊は新甸鎭を取り、九日には戰場雲低く細雨霏々たる中を右往左往に逃げ惑ふ敗敵を益々包圍圈內に追ひ詰めて此の方面の敵を殆んど殲滅に歸せしめた。之で戰鬪の一段落を終つたので我軍は爾後の作戰を考慮して各部隊の整頓を行つた。

左翼の丙部隊は新甸鎮を取り、九日には戰場雲低く細雨霏々たる中を右往左往に逃げ惑ふ敗敵を益々包圍圈内に追ひ詰めて此の方面の敵を殆んど殲滅に歸せしめた。之で戰鬪の一段落を終つたので我軍は爾後の作戰を考慮して各部隊の整頓を行つた。

以上の作戰に於て最も損害を受けたのは黃琪翔の率ゐる中央兵團で、孫連仲の左翼兵團の一部も大打擊を受け山地内に窒伏した。張自忠の右翼兵團は比較的損害少なかつたので、彼は我軍の左側背に迫り何か企圖する如き兆候があつた。

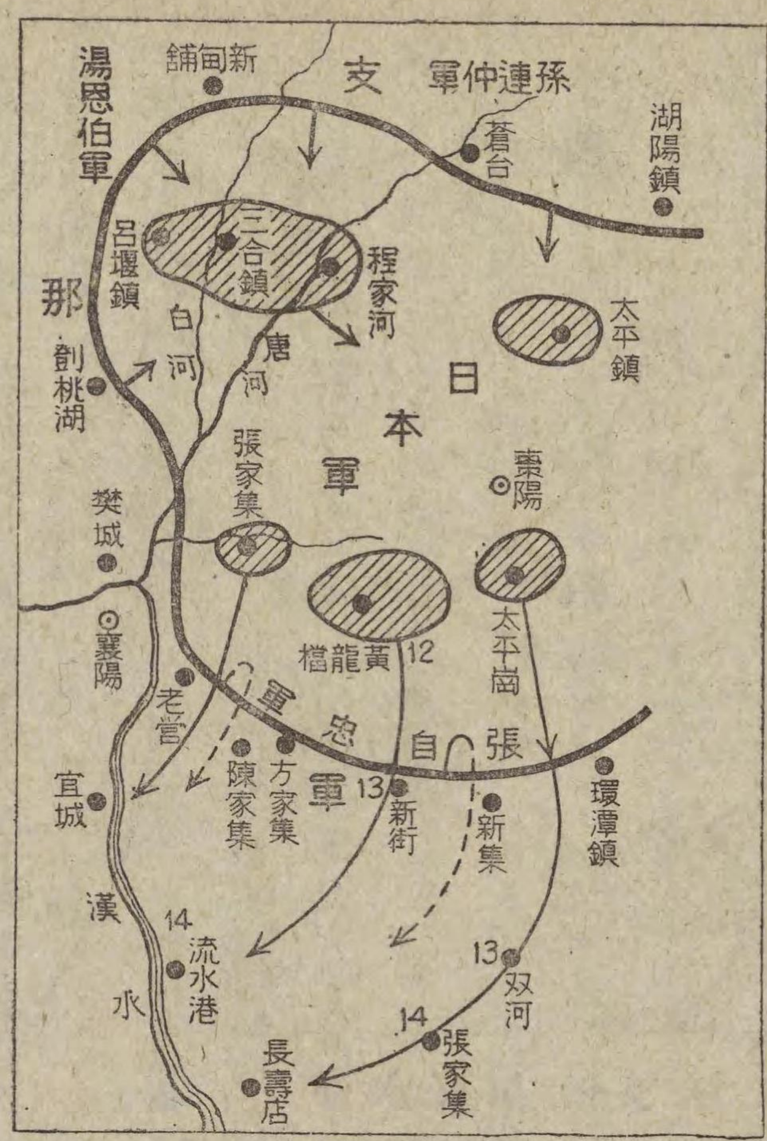
斯くの如く我軍は五十里の正面を以て僅か一週日の間に約四十里を踏破し此の間雲霞の如き大敵を擊破し殆んど當面の敵を一蹴したのは全く颱風一過の如き有樣であつた。日本軍の從來のやり方は上海や、南京や、漢口、廣東の如き要衝ならば之を攻略すると共に確保するのであるが、其の他の所では適當に敵を叩き付ければサツサと引揚げるのが普通であつた。

それで淺慮な敵は、今度の日本軍も亦其



漢水東方の包圍
（五月一日——九日）

の如く適宜引揚げを爲すべしと誤認し其の機に乘じ日本軍を包圍打倒して報復せんと、新來の軍に敗殘の兵を合せ、湯恩伯、孫連仲等は北方及び西方より、張自忠は南方より、攻擊せんと企圖した。當時に於ける形勢は挿圖の如く日本軍は寡兵を以て優勢な敵に包圍された形であつて、甚だ危險のやうに見えた。此の際日本軍は如何なる作戰を採るべきか。我軍は先づ南方の張自忠軍を粉碎し然る後北方の敵に當らんとした。之は至當のことである。奈破翁戰史には此のやうなことが多い。此の際最も大事なことは神速に決心することである。若しも逡巡躊躇、右顧左眄せんか遂には時機を失して空しく窘蹙の運命に陷るのみである。當時日本軍の決心は實に敏速にして其の行動亦之に伴ひ



日本軍の漢水河畔への反擊
（五月中旬）

遂に敵をして應接に遑なく敗滅に歸せしめたのである。

【其二　對張自忠軍反擊戰（五月十二日―十六日）】　張自忠の率ゐる約八個師の大軍は環潭鎭、新集、新街、方家集、老營の線に亙り、將に日本軍を呑まんとするの隊勢を執つてゐた。之に對し日本軍は張家集、黃龍檔、太

遂に敵をして應接に遑なく敗滅に歸せしめたのである。

【其二　對張自忠軍反擊戰(五月十二日—十六日)】　張自忠の率ゐる約八個師の大軍は環潭鎭、新集、新街、方家集、老營の線に亙り、將に日本軍を呑まんとするの隊勢を執つてゐた。之に對し日本軍は張家集、黃龍檔、太平崗附近に集結せる軍隊を以て反轉攻勢に進んだ。

今までは前面にある敵に對し猛進攻擊すること約十日に及んだ我軍は、今度は息つく暇もなく背後に迫る敵に當るのである。小癪な張軍何をするかと、五月十二日各隊一齊に攻擊前進を開始し、激戰の後、翌十三日には漢水、方家集、新街、双河の線に達し、十四日には宜城對岸、流水港、張家集の線を突破し、十五、十六日の兩日を以て殆んど當面の敵を掃蕩し、陳家集附近の戰に於ては張自忠の軍司令部を包圍急襲し、張以下幕僚多數を斃した。敵軍士氣沮喪漢水を越えて潰走した。玆に於て我軍は十六日を以て直ちに反轉、今度は北方の敵に對する殲滅戰に向つたのである。

此のやうに我軍の背後を突き奇功を僥倖せんと意氣込んで攻勢に轉じて來た張自忠は、我が猛反擊に會ひて僅僅四日間の內に潰滅し、あはれ軍司令官自身も鋒鏑の間に歿したのである。

【其三　唐河河畔反擊戰(五月十一日—二十二日)】　我軍は前述の如く南方にある部隊を以て張自忠の軍を反擊せしめ、北方にある部隊を以て暫く敵を持久し、適宜の時機に後退して敵を誘致し然る後急に反轉し唐河右岸地區に於て敵に殲滅的打擊を與へんとした。

北方にある諸部隊は夫々太平鎭、程家河、三合鎭、呂堰鎭、附近に集結してゐたが、敵は沘源、新野、樊城北方附近に大軍を展開し日本軍が例により撤退を始めたならば直ちに其れに附け込まんと待ち構へてゐた。其の內

南方にある日本軍部隊が前述の如く張自忠軍に向ひ反轉前進したので、敵は好機乘ずべしと五月十二日頃より一齊に攻擊前進を起した。

我軍は或は奇襲し或は反擊して敵の鋭鋒を挫き、蒼臺附近の戰に於ては敵の師團長以下幕僚を悉く斃した。敵は益々兵力を增加し棗陽に向ひ求心的に前進し其の行動活潑なるに至つた。我軍は此の好機を捕捉し敵を唐河左岸地區に誘致して之を擊滅するに決し、十五日頃より各部隊に反轉を命じ十六日夜全力を棗陽附近に集結した。即ち寺壯、棗陽、耿家集、峪山附近に亙る線に新陣容を整へたのである。此の時南方張自忠軍に向つた部隊も其の任を終つて此の新作戰に加はつた。

敵は其れとも知らず、今度こそは日本軍を擊滅し吳れんと白河を渡り唐河を越え非常な勢ひを以て押し寄せて來た。之は支那軍の常習で、少しく弱味を見せると夫れに附け込み何處までも强くやつて來るのである。其れだけ又捉へ易いのでもある。

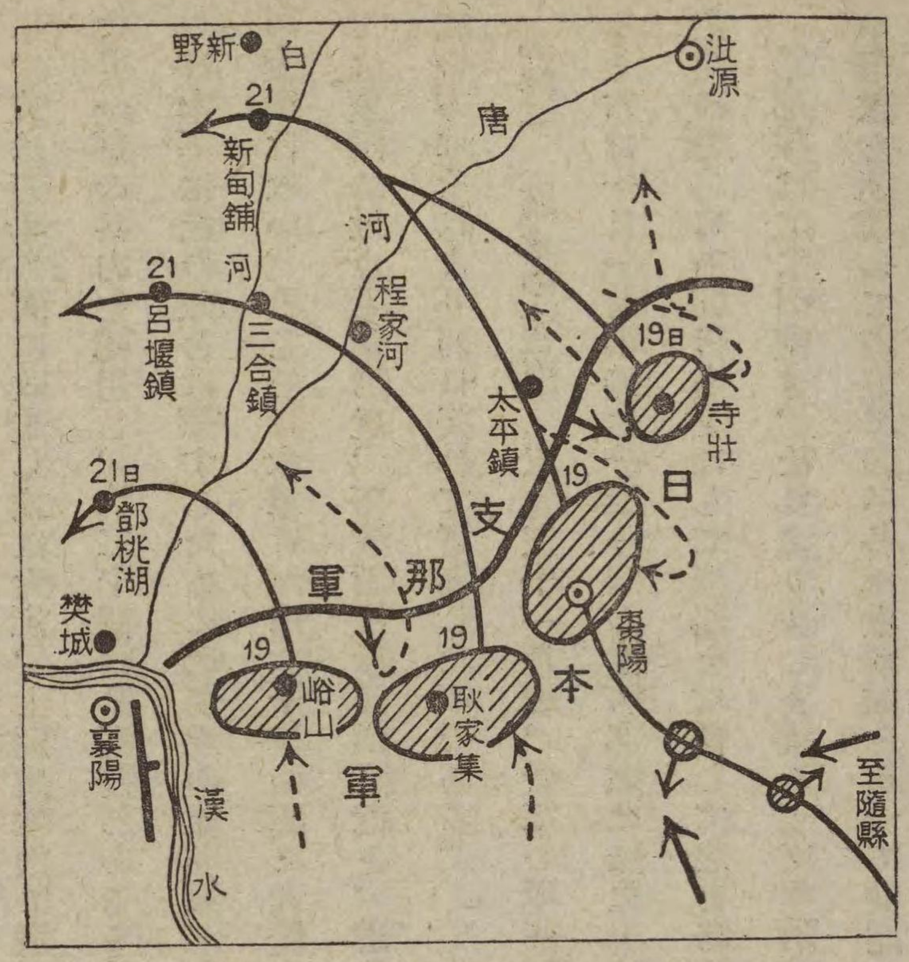
此の時である。彼等は日本軍大敗走、支那軍大勝利のニュースを世界に撒いたのは。曾つて昭和十三年徐州會戰の臺兒莊の戰の時も矢張り此のやうな戰況を、支那軍の大勝利として宣傳したのであつたが、其の言の乾かぬ內に徐州の陷落を見たが、今度も亦其の二の舞である。

其のやうに、敵が附け込んでやつて來るのは、日本軍としては正に思ふ壺だつた。逃げる敵を追擊するのは厄介だが、懷に飛び込んで來る鳥を捉へるのは簡單至極である。

敵は唐河附近に少くも約二十萬の兵を集めた。頃合はよしと我軍は十九日の早曉不意に反轉攻勢に轉じ怒濤の

其のやうに、敵が附け込んでやつて來るのは、日本軍としては正に思ふ壺だつた。逃げる敵を追撃するのは厄介だが、懷に飛び込んで來る鳥を捉へるのは簡單至極である。

敵は唐河附近に少くも約二十萬の兵を集めた。頃合はよしと我軍は十九日の早曉不意に反轉攻勢に轉じ怒濤の如く逆撃し隨所敵を粉碎し、二十一日には唐河、白河を越え追撃前進して新甸鎮、呂堰鎮、劉桃湖の線を占領した。



唐河々畔反撃戰
（五月中・下旬）

斯くの如く僅か三日間を以て敵を撃碎したので二十二日は追撃を中止し所在の殘敵を掃蕩しつゝ逐次態勢を準備した。

次いで大洪山及び大別山西部の山間に潛伏せる敵を掃蕩し、かく、漢水左岸の地區の安全を確保したる後、愈々漢水右岸の作戰卽ち宜昌攻略戰となつたのである。

五月一日作戰開始以來二旬餘、此の間炎熱と泥濘を冒し西部大別山、大洪山の嶮を突破し懸軍百里、襄東守備三十餘萬の敵精鋭を撃破粉碎し、戰場に遺棄したる敵屍體約三萬三千と云ふ赫々たる戰果を收め衝天の意氣を以て次の作戰準備に移つたのである。

其二　漢水右岸宜昌攻略（六月一日—六月十三日）

漢水左岸に於て大打擊を受けた敵軍の一は漢水右岸に退却して河岸の防備に就き、其他は或は鄧縣方面に遁走し、或は南陽方面に敗走し或は大洪、大別山地內に遁竄蟄伏した。漢水右岸には新たに長沙方面にある第九戰區より一部の兵力を轉用し、約二十個師を配列しあるものゝやうである。

日本軍は此の敵を攻擊するためには漢水の敵前渡河をせねばならぬ。支那兵は弱兵とは云へ、此の渡河は容易の業ではない。そこで日本軍は河川六十里の間に大體三箇所の渡河點を選み此處より渡つたのである。卽ち上流では襄陽に近き老營附近、下流では沙洋鎭附近と、潛江附近との三である。而して先づ上流の方の渡河を始め下流の方はそれより四日後れて實施したのである。

【其一　漢水の渡河】　五月三十一日夜、我軍の甲部隊は老營附近より漢水を奇襲渡河し敵の抵抗を受くることなく六月一日午前零時七分第一回の渡河部隊は無血上陸に成功す。引續き主力の渡河を續行して對岸に地步を占むるや直ちに右向け右をなして襄陽を攻擊して之を略取し更に反轉して南進した。

乙部隊は之に引續き、それより少し下流の王家集附近より渡河し敵の抵抗を受けたるも之を排除して上陸し、甲部隊と連繫して南方に向ひ各々數縱隊となつて前進し、六月三日頃には南漳、武安堰、雷家河、宜城の線に、同五日には轉頭灣、栗溪、樂鄕關、利河口の線に達した。

丙部隊は四日夜舊口鎭附近より渡河を開始し敵の抵抗を排除して前岸に地步を占めたる後、五日直ちに沙洋鎭を攻略して西進した。

同五日には轉頭灣、栗溪、樂鄉關、利河口の線に達した。

丙部隊は四日夜舊口鎭附近より渡河を開始し敵の抵抗を排除して前岸に地歩を占めたる後、五日直ちに沙洋鎭を攻略して西進した。

又丁部隊も四日夜潛江北方より渡河を始め敵の大なる抵抗を受くることなく渡河を完了し、五日拂曉より當面の敵を攻擊し頑强なる抵抗を擊破し、丙部隊と相呼應して西進した。

甲乙丙丁の各部隊は進むに從ひ漸次堅固なる陣地に據る敵の頑强なる抵抗を排除し、六月六日には荊門の要鎭を陷れ、八日には荊州、次いで沙市を略し、九日には遠安を、十日には當陽の堅壘を奪取した。此處より宜昌まで約十二里、各隊皆宜昌一番乘りを競ひ意氣頗る盛んである。

【其二　當陽のこと】　當陽は宜昌の入口とも云へる防禦陣地で、激戰の地だつたが、我軍の空爆によつて徹底的に破壞された。こゝは三國志の舞臺になつて蜀の玄德が魏の曹操の大軍に圍まれて既に危いところを張飛が橋の上に馬を立て追擊して來る敵の大軍を叱咤して進擊を拒んだところである。

通俗三國志を見ると「張飛只一騎、長坂橋の上に馬を立て、丈八の矛を横たへ、甲を脱いで鞍にかけ、頭の髪倒に上りて獅子の怒り毛の如く、眼は逆に裂けて光り、百鍊の鏡に朱を洒ぎ、怒れる鬼鬚左右に分れて、惡鬼羅刹も是には爭でか及ぶべき」とある。勝ち誇つて攻めかけて來た曹操も、此の豪傑が大音あげ、吾は乃ち燕人張飛なり、誰か來たりて勝負を決せんと、雷のやうに叫ぶのを聞くと、關羽も强いが、弟分の張飛と云ふ奴は百萬の軍中に入りて大將の首を取ること囊を探つて物を取るよりも易しと聞くと云つて、急に大將の旗を隱させ進軍を憚つた。其の時張飛が大音聲に「誰か出でゝ快く戰はん」と呶鳴ると、あまりに怖ろしかつたので曹操の側に

附いてゐた夏侯覇と云ふ大將が氣を失つて馬から倒に落ちたので、數十萬の大軍が一度に浮足立つて總崩れになつた。其の有樣は黃口の赤ん坊が雷の聲を聞いて戰き、病體の樵夫が虎の吼えるを聞いて怕るゝが如くに、槍を捨て戈を投げて、潮の退くが如く、山の崩れるが如く、押し殺され踏み倒され、頭を損じ手足を折るもの、其の數あげて計へがたし、總大將の曹操までが馬を飛ばし色を失つて逃げ、冠を落し簪をなくして魂も身に附かず、張遼、許褚がやうやう追ひ付き轡を取つて引き止めたと云ふのだから、張飛の聲が餘程凄かつたと見える。

今度の戰鬪で當陽の陣地を守つてゐた敵の正規軍は、此の豪快な張飛のことを思ひ出したり、又指揮官から其の話をもて激勵され、必死に戰つたのだらうが、日本軍の强攻猛擊に會つては、丁度張飛に睨まれた曹操の大軍のやうに總崩れになつて此の陣地を捨てたものらしい。

其の張飛の突つ立つた長坂橋は町の入口に流れてゐる沮水に架かつたものであつたらう、今でも張飛の武勇を記念する碑は宜昌へ出る街道の側にある公園の中の小高い所の亭に「長坂雄風」と筆太に書いた碑が建つてゐる。張飛と桃園に義を結んだ關羽が死後に亡靈となつて出たのも、此の當陽の西に當る玉泉寺のある山であらう。關羽の亡靈が此の山僧の所へ、或夜月白く風清き折から、馬に跨り青龍刀を提げ、忽然と虛空より降り來たりて僧と問答したと傳へられてゐる。

【宜昌突入】　六月十日當陽を陷れた我が甲乙の兩部隊は怒濤の如く進擊し翌十一日には峽口、玉泉寺、鴉雀嶺子の線に進出し宜昌直接の第一防禦陣地を力攻して之を突破し其の西麓に出でた。

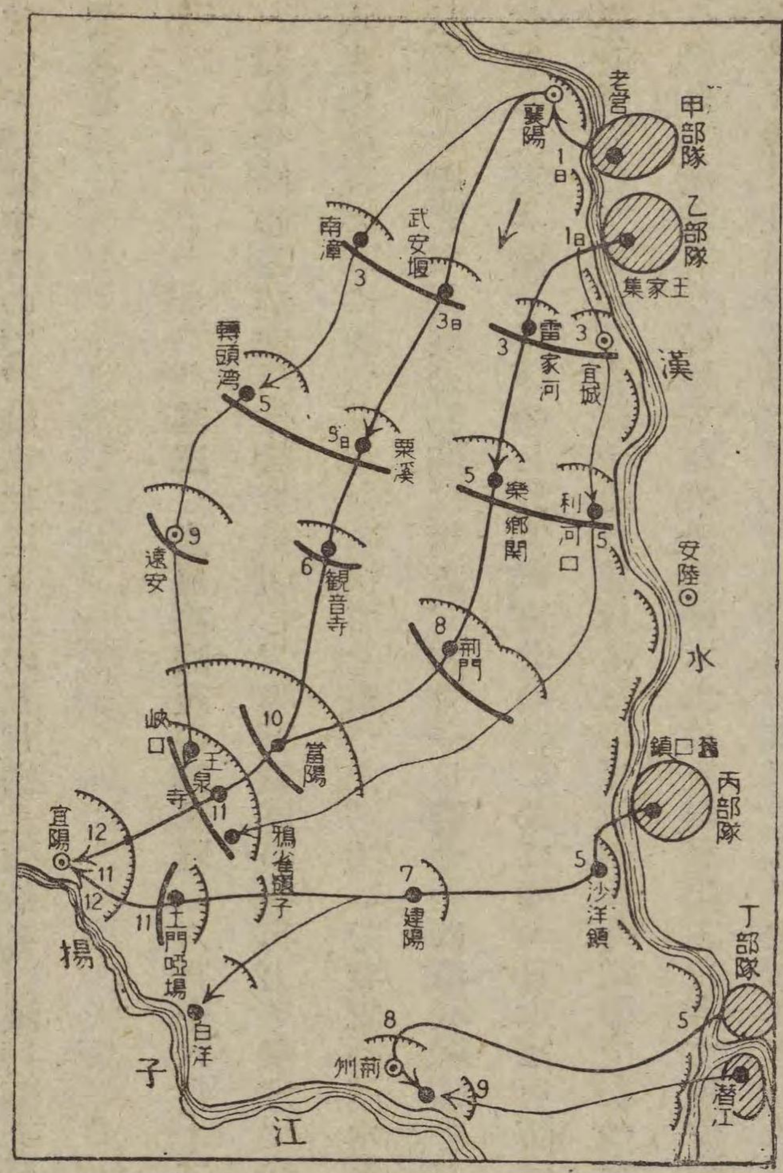
又南方を前進した丙部隊は十日夜より敵陣地の攻擊を續行し十一日正午頃には土門啞場の陣地を奪取し引續き宜昌東側の東郊直地を攻擊し其の一部は十一日日没前宜昌東南角に突入した。

【宜昌突入】 六月十日當陽を陷れた我が甲乙の兩部隊は怒濤の如く進擊し翌十一日には峽口、玉泉寺、鴉雀嶺子の線に進出し宜昌直接の第一防禦陣地を力攻して之を突破し其の西麓に出でた。

又南方を前進した丙部隊は十日夜より敵陣地の攻擊を續行し十一日正午頃には土門啞場の陣地を奪取し引續き宜昌東側の複廓陣地を攻擊し其の一部は十一日日沒前宜昌東南角に突入した。

六月十二日、甲乙兩部隊は本道に沿ひ宜昌に向ひ敵を追擊し其の一部は日沒頃宜昌に進入した。丙部隊は其の一部前日宜昌に突入したるに勢ひを得今早朝來、宜昌東側の敵を擊滅して市内の掃蕩を實施した。斯くして宜昌は六月十二日を以て我軍の手に歸したのである。しかし完全に其の占領の終つたのは六月十六日であつた。

六月一日漢水渡河開始以來茲に約二週間、漢水の濁流を渡り沼澤を跋渉し、破壞されし道なき道を進擊し懸軍實に六十里、比較的精鋭なる敵中央正規軍の頑强なる抵抗を排除し、六月十二日目指す目標宜昌を占領して作戰所期の目的を達成した。此の間に於て敵に與へた損害は戰場に遺棄したる屍體約一萬七千、捕虜約二



宜昌攻略

（六月一日——十二日）

千七百、各種砲約三十門、其他多數にして赫々たる戰果を收めた。

然るに敗敵は我軍の進むに從ひ或は遁竄せる山谷地帶より現はれ、或は潛伏せる村落より出で來たりて我軍の後方を攪亂するので、我軍は又々此の五月蠅き蠢敵を討滅掃蕩せねばならなかつた、之が爲め次の作戰が起るのである。

其三　宜昌攻略後の掃蕩戰（六月十六日―二十六日）

敵は今回の我が宜昌作戰を重視し、第五戰區の全兵力を擧げて我軍の殲滅を圖つたが旣記の如く先づ第一に漢水左岸地區の戰に於て甚大なる損害を被つた。次いで我軍の漢水を渡河して右岸に進攻作戰を行ふに方り、敵は萬難を排して局面の打開に努め、六月一日蔣介石は第五戰區を左右の兩兵團に區分し陳誠をして右兵團、李宗仁をして左兵團を指揮せしめ當陽南北の線に於て極力日本軍を防いだが成らず。遂に六月十二日を以て宜昌の陷落を見たのである。當陽附近に於ける敵の抵抗が案外頑强であつたのは之が爲めである。

それで漢水右岸の地で敗れた敵の大部は支離滅裂となりて遠安附近の山地內に遁入し收拾すべからざる狀態となり、他は宜昌の北方、西北方に潰走した。されど敵は戰略上、宜昌の重要性に鑑み、飽くまで宜昌を奪還せんと第五戰區に於て使用し得る中央軍全部を漢水右岸に集結して、我軍の背後に迫まり且つ飛行機を協力せしめて其の行動漸次活潑となつて來た。

我軍は宜昌を攻略して作戰の目的を達成したるを以て、主力を以て漢水東岸地區に反轉せんと其の部署を整へ東進せんとした所、丁度敵は前述の如く我軍の側背近く迫まり來たつたので、我は直ちに東進を中止し此の敵

と第五戰區にかて使用し得る中央軍全部を漢水右岸に集結して　我軍の背後に迫まり且つ飛行機を協力せしめて其の行動漸次活潑となつて來た。

我軍は宜昌を攻略して作戰の目的を達成したるを以て、主力を以て漢水東岸地區に反轉せんと其の部署を整へ東進せんとした所、丁度敵は前述の如く我軍の側背近く迫まり來たつたので、我は直ちに東進を中止し此の敵を擊攘して漢水右岸地區を確保するに決した。

【戰鬪經過の概要】　當時敵の兵力は陳誠の統一指揮下にある湯恩伯軍を主とするもので、宜昌北方より安陸西北方漢水に亙り三十數個師の多きに上つてゐた。之に對し我軍は大體四個の部隊に分けられてあつた。即ち

一、荆門を中心とする東方部隊

二、當陽を中心とする中央部隊

三、宜昌を中心とする西方部隊

以上の三部隊を以て北方より押し寄せ來る敵を反擊すると共に尙ほ他の一部隊を以て後方の建陽、荆州附近を守備せしめた。

我軍の反擊は六月十六日頃から始まつたが、時梅雨期漸く至り、連日の降雨に依り補給及び部隊行動の困難を見たるも、之に屈せず猛烈なる攻擊を續行した。敵將陳誠は兵力の大を恃み激勵大いに努めたが、第一線部隊の戰意著しく低下し、上官の頻繁なる激勵、訓示、督戰にも拘はらず、各方面共、我軍のために擊攘せられた。

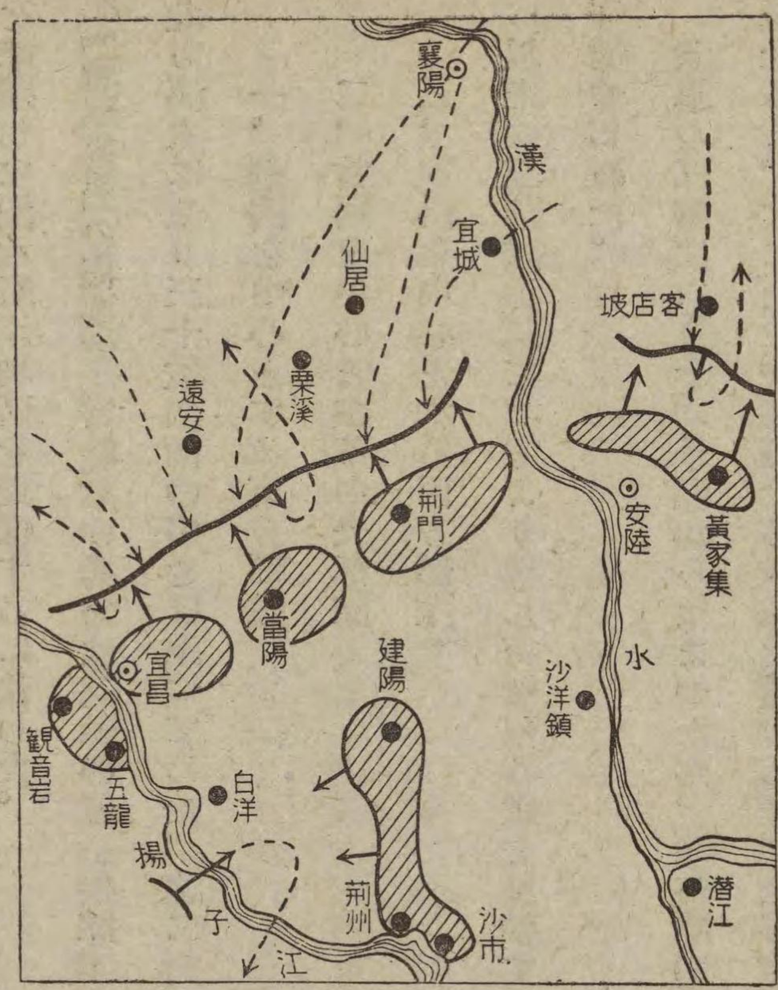
敵は全く無統制に何處からともなく出現し、或時優勢の敵が我が衞生隊、野戰病院等の縱隊と遭遇したが、我が輜重兵の擊攘する所となつた。斯くて我軍は二十六日までの間に大體の掃蕩を終つたので、二十七日最高司令部は漢口に歸還することゝなつた。

其の後宜昌を根據として其の北方に占領地域を擴張し、六月二十九日には一部を以て敵前渡河を決行し宜昌對岸の觀音岩より五龍高地に亙る江岸の要線を確保して陣地の增强を圖り、又漢水左岸要地附近の敵をも掃蕩し、七月十日頃迄に其の態勢整理を略々完了した。

【宜昌作戰の綜合戰果】 以上を以て宜昌作戰は一段落を告げたのである。勿論敵のゲリラ的蠢動は絶えることはなかつた。五月一日作戰開始より七月上旬頃迄に於ける綜合戰果の概要を述べると、

一、交戰敵兵力　約四十七萬
二、遺棄屍體　約九萬
三、俘虜　約五千
四、各種砲　約八十
五、機銃、小銃　約一萬五千
其他無數

右に對し我軍の戰死約一千八百、戰傷約五千五百であつた。



宜昌攻略後の戰
（六月中旬—下旬）

其四　評論

宜昌作戰は漢口攻略戰に次ぐ重要な作戰であつて其の地域の幅員は東西八十里、南北百里に亙り我が九州が樂に入つて了ふと云ふ廣さである。此の間を數倍優勢な敵を相手に、或は進みて敵を包圍殲滅し、或は退いて敵を

宜昌作戰は漢口攻略戰に次ぐ重要な作戰であつて其の地域の幅員は東西八十里、南北百里に亙り我が九州が樂に入つて了ふと云ふ廣さである。此の間を數倍優勢な敵を相手に、或は進みて敵を包圍殲滅し、或は退いて敵を誘ひ急に反擊して之を袋叩きにし、或は山間に潛伏せる敵を奇襲し、或は敵前に濁流を强行渡河し、或は懸軍長驅最後の目標たる宜昌に突進攻略したるが如き、其の作戰の奇にして妙なる、蓋し從來稀に見る所にして伊太利役に於ける奈破翁の作戰よりも痛快な所あり、中國役に於ける秀吉の戰略よりも神速な所があつて、戰術上研究の價値頗る多い。しかも此の作戰を五月一日より六月の末に至る僅々二箇月を以て完遂するに至つては戰史の上に赫々たる範例を示したものである。

【我が戰鬪力】　我軍の過ぐる所、東には大別、大洪の山脈が突出し、西には四川の山彙が横たはり、其の間に濁流漫々たる漢水あり、之に潮する幾多の大河小流が縱横に走り、それに道と云ふ道、橋と云ふ橋は悉く皆敵の焦土戰術によつて破壞され、村落は燒き拂はれ、舟は解體されると云ふ有樣で事實今度の作戰は、敵との戰は勿論であるが、道路との鬪ひとも言へるのである。此の難行軍を敵と戰ひつゝ、二箇月の間每日平均七里ほども步いたと云ふ部隊があるに至りては只々驚嘆の外はないのである。

今之を此の間獨逸軍の行つたフランドルの殲滅戰に比較して見る。フランドル地方は丁度我が栃木縣位の大きさで、其の中で百萬の獨軍と百萬の英佛軍が戰つた譯であるが、こちらの戰場は其の數倍も廣い九州のやうな圈內で、約五十個師の敵を向ふに廻はし、其の何分の一しかもない僅かの師團で、之を叩き挫いて一擧に宜昌と云

千五百であつた。

ふ重慶の咽喉首まで押へて了つたのである。しかも鐵兜を燒く炎天の下で、或は濕陰極まる霖雨の間で。

獨軍は機械化部隊をもつての電擊戰で名を賣つたが、其の機械化部隊では威力を發揮することは愚か、身動きも出來なからうと思はれる本戰場の惡路を、終始敵と戰ひつゝ、六十日間每日平均七里を徒步で重い武裝をつけて强行軍して來たものである。此の日本軍の征服範圍は獨逸國境からフランドルや巴里に到著したと云つた程度のものでなく、距離にして巴里を拔けオルレアンを越えボルドーを通過し佛蘭西の全土を通り拔けてビスケー灣に出て了つてゐる程である。獨軍固より歐洲第一の强兵であらうが、宜昌作戰に於ける我軍の戰鬪力を一例として彼に比較して見ると、我が勝利の素因も自然に理解されるのである。

【宜昌の價値】　宜昌は漢口の上流三百八十海里、揚子江では六港の一つに數へらるゝ貿易港で、四川貿易の中繼たる點に、一番重大な役割があり、人口約六萬を有する江岸の近代都市である。日本軍の今回之を狙つたのは必ずしも宜昌の持つ經濟的價値と云ふのではあるまい。宜昌には絕好な飛行基地があつて我軍で之を取つたら重慶爆擊には持つて來いの距離だ。漢口だと爆擊機だけしか重慶まで飛べない。それで敵戰鬪機が舞ひ上つて來た時、戰ふのに餘計な骨が折れる。宜昌からだと、戰鬪機も樂に飛べるので我が荒鷲、若鷲等が常に垂涎して措かない所であつた。今度は其の宜昌まで取つて了ふと云ふのだ。卽ち宜昌の占領により我が空軍が重慶空爆に赴く距離が非常に短縮される譯なのである。

漢口から敵の根據重慶までは約三百里もある。支那史を見ると此の間、軍を進められぬ譯はない。しかし何と云つても水路を利用するのが便である。然るに此の間には三峽と稱する難航路が、宜昌の上流何百里と云ふ間に

ない所であつた。今度は其の宜昌まで取つて了ふと云ふのだ。即ち宜昌の占領により我が空軍が重慶空爆に赴く距離が非常に短縮される譯なのである。

漢口から敵の根據重慶までは約三百里もある。支那史を見ると此の間、軍を進められぬ譯はない。しかし何と云つても水路を利用するのが便である。然るに此の間には三峽と稱する難航路が、宜昌の上流何百里と云ふ間に亙つてゐる。兩側からは山が迫まり、巨岩怪石が隱現し河幅は六百米内外であるが、流速が一時間平均八浬、最急流では十四浬に及び深さは二三十尋に達してゐる。故に舟は先づ宜昌までと見なければならぬ。其の外宜昌は長江を利用する重慶への補給路であるし、又漢口の日本軍勢力を壓迫しようと構へてゐる敵第五戰區と云ふ五月蠅き存在を此の際破碎するには宜昌までの地區を掃蕩して、一は漢口附近の安全を確保すると共に、一は重慶に鋭い匕首を突き附けてやらうと云ふ、つまり戰略、政略上の考へからして此の作戰が企てられたものであらう。

故に此のやうに宜昌を占領して置けば重慶の玄關口を抑へつけ、武漢三鎭の地位を强化し、爾後南方に向つて作戰する場合にも戰略的の利益を享けられる譯である。果せる哉重慶に於ては宜昌の陷落を憾み執拗に其の奪還を企てたが遂に我軍の反擊に會ひて果すことが出來なかつた　それ故日本軍は從來掃蕩を終れば大抵舊駐屯地に歸つたものだが、今度は依然宜昌を確保するのみならず、其の對岸の要地までも攻略して此の長江の峽口を扼し其の軍事的價値を增强したのである。

【古史參照】　本作戰地域内に於ける著名な古史若干を述べて研究上の參考に供する。

本作戰地域は戰國、漢時代よりは三國時代以下に於ける古戰場が多い。蜀の玄德（劉備）が荆州（江陵）の戰に魏の曹操と戰ひ敗れた。曹操之を追つて赤壁（岳州の北）に至り、吳の孫權の將周瑜の奇策に陷つて大敗を喫し（赤壁の戰）身を以て逃れ北に歸つた。此の時曹操は曹仁を荆州（江陵又は郢）に留めて此の方面の防禦に任

じた。

荆州は古來此の方面の重鎭として巴蜀（四川）の門戸と稱せられ、古の楚の都でもあつた爲め秦の名將白起のため攻略されたことがある。軍事、政治、交通、經濟上の要地に居り、夙に帝王の資たる形勝の地と誇稱され英雄共の爭奪した所である。城は關羽の築くところと傳へられてゐる。

吳の將周瑜進んで曹仁を荆州に攻めて之を取り爾來此處に吳の軍兵を駐屯せしめた。曹仁敗れて宜昌に退いた吳將呂蒙進んで之を破る、曹仁更に北に走り襄陽の對岸樊城に據り河を前にして防守した。之に對し今度は蜀の關羽が曹仁を攻擊し漢水を止めて水攻めにして樊城を陷れた。

樊城の西方にある隆中山は孔明が隱棲して玄德の三顧の恩に感じて出たと云ふ草蘆山といはれる。荆州、宜昌、樊城間は以上の如く魏、吳、蜀三軍の馳驅した所で、あるが、詳細は東洋史に讓ることゝする。

安陸（鐘祥）は古來兵家必爭の地として著聞する。三國時代激烈な爭鬪は矢張り此處を中心として展開された。宋代に至り金軍の風發南下するに當り宋の忠臣岳飛が死力を盡して敵を擊破し一時南遷した宋朝を再び隆盛に向はしめた處として著名である。人口約一萬五千、周圍約一里半の城廓がある。後ち元の勇將伯顏のため陷る所となつた。

襄陽は三國及び南北朝時代に武力的衝突地點として爭奪を繰り返され、隋が天下を一統したのは襄陽の攻略から始まつたと云はれ。又元軍の南下に當り宋軍は此處に據つて奮鬪したが全く力盡きて敗れ、宋の國祚は襄陽の敗北から滅亡したと云はれる程戰略上の要衝を占めてゐる。

襄陽は三國及び南北朝時代に武力的衝突地點として爭奪を繰り返され、隋が天下を一統したのは襄陽の攻略から始まつたと云はれ。又元軍の南下に當り宋軍は此處に據つて奮鬪したが全く力盡きて敗れ、宋の國祚は襄陽の

敗北から滅亡したと云はれる程戰略上の要衝を占めてゐる。

隨縣は春秋時代に於て隨國の首都であり、後年元軍の大擧南下した時、宋將張順が此處に據つて敵を大破して驍名を轟かしたことがある。人口約三萬、周圍約一里半の城壁がある。

大要以上のやうであるが、其の作戰の規模と云ひ、其の兵力と云ひ到底今回に於ける日本軍の戰略の雄大なるに及ぶべくもない。しかし何れも皆、其の時の名將である秦の白起、魏の曹操、吳の周瑜、蜀の孔明並に關羽、宋の岳飛、元の伯顏等の智勇を鬪はした所、思へば史趣の津々たるものがある。

【日支兩軍戰略概觀】 前にも述べた如く此の宜昌作戰ほど痛快にして研究上の利あるものは蓋し尠ない。今ざつと譬喩を以て其の一斑を描いて見る。

日本軍の作戰は漢水の東卽ち襄東と西卽ち襄西とに於て其の手法を異にしてゐる。譬へて見れば襄東の方は雉子の戰術で、襄西の方は將棋の雪隱詰の妙手であると云へよう。

雉子の蛇に對する戰法は、自分の體を蛇の捲きつく儘に任せて置いて、急に羽ばたきをして、それを寸斷するのである。日本軍は退きつゝ、敵が勢ひに乘じて追ひ來たるのを充分に誘ひ寄せた上、よい潮時を見計らひ急に反擊して之を殲滅したあたりは全く雉子の對蛇戰法そつくりで絕妙絕快と云ふべしである。

此の時に於ける支那軍の戰法は何れかと云へば勞せずして甘い汁を吸ふと云ふ狡い精神が根本をなしてゐた。彼等は襄陽の陷落までは、友軍の難戰苦鬪を殆んど傍觀してゐたのである。此の時に於ける彼等の考へでは戰況

が有利の兆あれば進んで戰線に參加するし、之に反し戰勢が不利であれば其の卷き添へを喰はぬ前に避難すると云ふ、寔に惡い支那人通有の性癖を持ち合せて暫く洞ケ峠をきめ込んでゐたのである。此の方面の大將孫連仲などは殊に此の類であつた。然るに日本軍が俄に退き始めた。之を見た彼等は得たり賢し、今度こそ我等が甘い汁を吸ひ得る好機なりと我れ先きにと突進したのである。それが天罰で遂に日本軍の術中に陷つて殲滅の運命に陷つたのである。支那人の持てる洞ケ峠思想は常によく戰の上に現はれて來るのである。此の見を以て支那戰史を觀ると古今皆然らざるはなしと云ふ有樣である。

他の雪隱詰と云ふのは漢水以西の地區で支那軍を宜昌に押し詰めた作戰のことである。宜昌は其の後方は長江三峽の險に阻まれ、南は長江、北は峻山に遮ぎられ、卽ち南、西、北の三方塞がりの全然雪隱詰めとなつた形である。此の時に於ける日本軍の作戰は押しの一方で、北は襄陽方面から、東は沙洋鎭、潛江方面からグン〳〵と敵を雪隱の宜昌へ押し捲つたのであつて、襄東に於ける味のある作戰とは其の趣きを異にした。玆に日本軍の作戰の妙があるのである。世に「人を見て法を說け」と云ふことがある。襄東の作戰は確に此の見人說法の戰術であつたが、襄西の作戰は何れかと云へば「地を見て手を打て」と云ふのであらう。此の地形では此の雪隱詰めの戰法は妙手である。奈破翁と雖も此のやうな妙手は打てなかつた。

蔣介石は負け惜みに常に次の如きことを言つた。現在の戰局は磁鐵戰である。故に我は磁力のやうに日本軍を奥地へ引きつけて最後に叩かうと云ふのである。此の意味の訓示は部下軍隊に誤まられ、襄東に於ては敗退の姿勢から飛び出して袋叩きに會ひ、襄西に於ては、日本軍の漢水渡舟のエンジンの音を何か化物兵器と誤認し其の

蔣介石は負け惜みに常に次の如きことを言つた。現在の戰局は磁鐵戰である。故に我は磁力のやうに日本軍を奥地へ引きつけて最後に叩かうと云ふのである。此の意味の訓示は部下軍隊に誤まられ、襄東に於ては敗退の姿勢から飛び出して袋叩きに會ひ、襄西に於ては、日本軍の漢水渡舟のエンジンの音を何か化物兵器と誤認し其の怖氣に襲はれて敗走し遂には宜昌の雪隱にまで追ひ込まれて了つた。是れ兵の罪もあるが、磁石戰術を賞揚した蔣介石の罪が更に大である。退却戰法を賞用して勝つた試しはない。

數倍優勢な兵力を持てる支那軍は敵を誘致反擊しようと稱して退却戰法を取り。殆んど比較にならぬ程の寡少な兵力を持てる日本軍は攻勢を執つて敵を我が意の儘に扱き廻はす、此の兩者の差は戰はずして既に其の勝敗を決したものだ。宜昌作戰は實にそれを證する好戰例である。

第六節　佛印進駐（六月—十月）

内に脈動する日本の生命力は南へ南へと伸びて行く。皇軍が對蔣作戰上の必要から、北部佛印に進駐したのは昭和十五年の九月であつた。

昭和十三年夏頃から佛印經由の援蔣物資輸送問題が八釜しく論議され、日本と佛印との間の感情が極度に尖鋭化した。

日本は再三、再四、辭を盡して援蔣物資輸送の中止方を申入れた。すると佛國側は其のたび毎に激昂し、或は尊大極まる態度で、全然其の事實なしと嘯いた。海防港一面に援蔣物資は山と積んであり、鐵道も、トラックも日に夜を繼いで其の輸送に喘いでゐた。にも拘はらず佛印は横著にも其の事實なしと傲然嘯くのであつた。彼は

或る一種の優越感を以て日本を輕視し、支那事變をやりかけてゐる日本を見て、何が出來るか位に心中で嘲つてゐたのである。

日本の實力を以てすれば佛印を奪取する位は朝飯前の事であつた。只大義名分に顧みて之を敢てせず、成るべく外交の折衝によつて其の目的を達せんと、こと穏かに交渉を進めたのであるが、彼は仲々に頑强で快諾しない。

然るに昭和十五年六月、それは佛國にとつて、實に歴史的な運命の月であつた。佛國は獨逸との戰に完全に慘敗して其の軍門に降り、强氣一方のレイノー首相、マンデル内相以下、戰時内閣の閣僚どもは悉く捕へられ、敗戰佛蘭西は八十餘歳の老ペタン元帥の獨裁で、獨逸監視下に、更生への慘めな道を歩かねばならぬことになつた。

佛本國の潰敗は佛印の强硬論者達にとつて實に一大打撃であつた。日本の要求に對して、是れ迄のやうに無誠意な、小馬鹿にしたやうな回答ばかりはしてゐられないことを、彼等ははつきり知らねばならなかつた。

ペタンに反對なド・ゴール將軍の亡命政權がロンドンに樹てられたが、佛印は一時は其の去就に迷つたが、彼等はド・ゴールを去つてペタン政權に忠誠を誓ひ、そして日本の要求を容れることゝなつた。

彼等は日本の武力を知つてゐる。そして日本とド・ゴール政權（英國勢力）とは絶對に相容れないことも知つてゐる以上、此の際目と鼻の間にまで進んで來てゐる日本を無下に排斥する譯には行かぬ。そこで打算に敏に、保身に巧みな彼等は掌を反すが如く、ガラリと今までの態度を變へて日本の要求を容れ、佛印を通ずる援蔣物資輸送禁絶のことを受諾した。是れ固より親日精神からの快諾でなく、日本の實力の前への屈伏であつたのだ。そ

彼等は日本の武力を知つてゐる。そして日本とド・ゴール政權（英國勢力）とは絶對に相容れないことも知つてゐる以上、此の際目と鼻の間にまで進んで來てゐる日本を無下に排斥する譯には行かぬ。そこで打算に敏に、保身に巧みな彼等は掌を反すが如く、ガラリと今までの態度を變へて日本の要求を容れ、佛印を通ずる援蔣物資輸送禁絶のことを受諾した。是れ固より親日精神からの快諾でなく、日本の實力の前への屈伏であつたのだ。それで之から日佛の禁輸に關する會談交渉が始まるのであるが、茲で少しく佛印史の大要を述べて見る。此の事に就いては前卷白人の東漸史の中にも略說してある。

【佛印史略】 二千三百萬の人口を有する安南は建國四千年の歷史を持つてゐると稱してゐる。佛國が攻略する以前、卽ち一八〇二年阮福映なる者安南を統一して越南帝國を建設して以來其の勢力盛んとなり暹羅を畏縮せしめたものである。現在の安南は佛國の去勢政策により弱化したやうであるが、其の民族性は仲々悍勇で、曾つては三度までも元兵の侵攻を擊退し、明からの征服も十四年の後に擊退し、二十萬の淸兵を擊破して紅河の水流を屍體で堰き止めた勇武史を持つてゐる。

やがて西力の東漸するに遇ひ、一八五八年、佛帝ナポレオン三世は僅かなことを口實に理不盡な出兵を敢てして安南を奪取し越南帝を首府順化（ユエ）に幽閉して虛位を擁せしめ、內治外交の權力一切を掌握して今日に至つたのである。爾來八十年、帝位に卽くもの十三人もあつたが、暗殺、流謫、廢位の厄に會ひ、位を全うしたもの僅かに二人と云はれてゐる。それ程佛國からの壓迫を受けたのである。

安南人は古くから支那の文化を取り入れて漢字を使用して來たが、佛當局は漢字を廢止して佛語を强ひ、佛國以外の外國に留學することを禁じ、文學、科學、美術等一切を佛國化し、佛國を世界第一の富强國だと敎へ込んで其の同化に努めると共に、白人共通の搾取誅求を施したのである。

是等の不自然なる統治、苛酷なる政策は民衆の反感を買ひ叛亂、暴動の絶えることがない。日本と安南とは極めて古く德川幕府の鎖國以前に密接な通商關係があつた。近年佛國の封鎖政策から、經濟的にも文化的にも關係は薄くなつてゐたが、今回新しい關聯を持つやうになつた以上、此の二千三百萬佛印の民衆に日本の眞意を諒解し欣然として新秩序の建設に參加せしむる如く指導することは東亞の盟主なる日本に課せられた重大なる任務である。

左に聊か佛印並に南寧、欽州、廉州附近の古戰史の一端を參照のため述べて置く。

此の附近は支那と安南（今の佛印）との國境近くの關係上、支那側では邊防軍を置いた所である、安南の王城は現今の河內（ハノイ）の昇龍城で、兩國の著名な交戰は北宋以後のものである。

西曆一〇一〇年安南王黎桓なるもの雄略あり、宋軍を國境の諒山（ランソン）に破り、欽州、廉州に於て互市を行ふの權利を得た。一〇七五年に至るや、安南の勇將李常傑兵十萬を率ゐ道を分つて宋に侵入し欽州、廉州の二州を取り疾風の枯葉を捲くの勢ひを以て雷州半島以西廣東省の地を悉く征服し人を殺すこと八千人と傳へられる。

それより廣西省に進み宋將張守節と崑崙關に戰ひ勝つて張の首を擧げ、それより南寧に向ひ之を攻めて守將蘇緘を斃し五萬八千餘人を屠り、多くの捕虜を得て凱旋した。斯くて南寧、欽州、廉州の三州は安南領となつたのである。

宋の名臣王安石之を聞き大いに怒り郭逵、趙卨を遣はし兵八萬を以て安南を擊たしめた。郭逵は忽ち三州を回復し勢ひに乘じ更に國境を越えて安南の內地に侵入した。安南では又例の勇將李常傑出でゝ河內を通ずる富良

緘を斃し五萬八千餘人を屠り、多くの捕虜を得て凱旋した。斯くて南寧、欽州、廉州の三州は安南領となつたのである。

宋の名臣王安石之を聞き大いに怒り郭逵、趙卨を遣はし兵八萬を以て安南を擊たしめた。郭逵は忽ち三州を回復し勢ひに乘じ更に國境を越えて安南の內地に侵入した。安南では又例の勇將李常傑出でゝ河內を通ずる富良江（紅河）の我が岸に船兵を配置して宋軍を防いだ。荏苒幾日、宋の一將趙卨一計を案じ附近の材木を伐りこれで投石機のやうなものを急造し、安南軍の船陣に向ひ雨の如く石を投擲せしめた。が、遂に成功せず、兵約四萬を失ひ空しく歸つた。

されど安南軍の損害も多かつたので、其の後深く宋の國內に侵入せず、後相和して各々其の奪取した地を還へして國境の紛爭は終りを告げた。安南の戰勝を謳つた一句に次の如きものがある。

一　軍幕を欽廉に張つて
崑崙に守節を斬り
南寧に蘇緘を屠る

二　境に入つて兵倉を焚き
旗鼓風雷を起し
山河生面を開く

安南史若干の誇張あらんも、安南人必ずしも弱兵ではない。黎桓、李常傑の如き英傑あれば宋の天下を震駭せしむ。彼久しく佛印の威令に雌伏してゐるが、大東亞共榮の旗風靡く時、祖先英雄の血が湧き出でずとは誰が言

ひ得るものぞ。

水口關、長寧等の要地を攻略して國境を封鎖した。

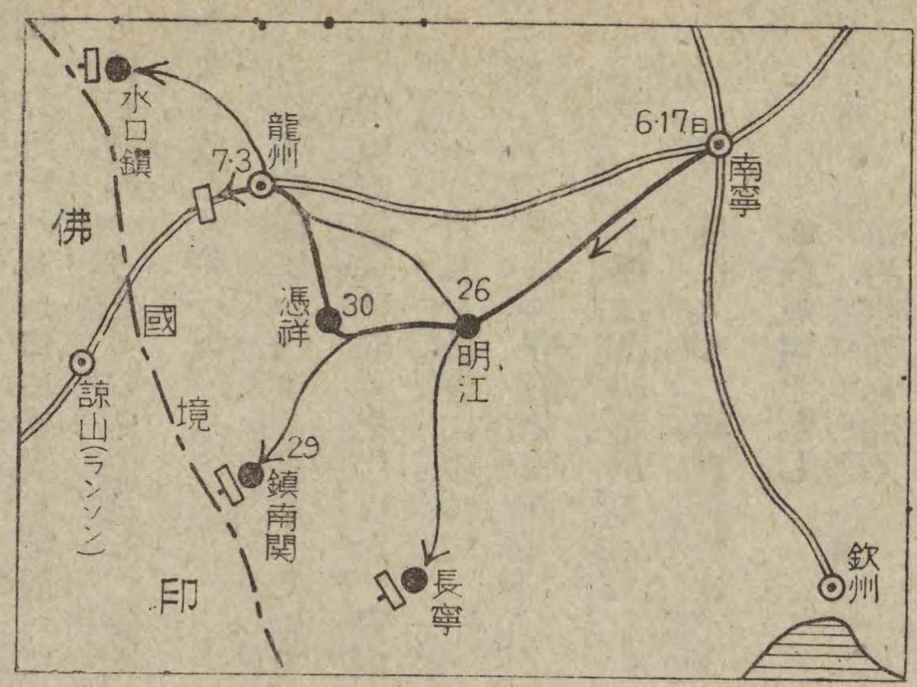
其二　日佛交渉（六月—九月）

然るに前述の如く佛國が獨軍に大敗して形勢が急變した結果、佛印側は自省したものか、屈服したものか、兎

其一　龍州作戰（六月—七月）

龍州は廣西と佛印との國境に近い要地であつて卽ち佛印からの援蔣物資輸送を遮斷する目的を以て此の作戰を企てたのである。日本軍が之より先き、欽州に上陸し南寧の要衝を攻略したのも、海軍が海岸封鎖に關し嚴重な通告を出したのも、其の主なる目的は佛印をして援蔣物資の輸送を中止せしめんが爲めであつた。然るに頑迷なる佛印は仲々承知しないので、先づ佛印國境に近い龍州附近に兵を進め、國境に封鎖の蓋を冠ぶせると云ふのである。

昭和十五年六月十七日は佛軍慘敗して獨軍に降伏した日である。偶々此の日我軍は南寧の守地より運動を起して約五十里西方の佛印國境に向ひ、同二十六日明江を占領し、それより一部を以て二十九日鎭南關を、主力を以て三十日憑祥を占領し更に龍州に向つた。



龍州作戰（六・七月）

七月二日左江の南岸より龍州附近の敵を攻擊して之を擊退し翌三日龍州を完全に占領し、更に同月下旬までに

七月二日左江の南岸より龍州附近の敵を攻撃して之を擊退し翌三日龍州を完全に占領し、更に同月下旬までに水口關、長寧等の要地を攻略して國境を封鎖した。

其二　日佛交渉（六月—九月）

然るに前述の如く佛國が獨軍に大敗して形勢が急變した結果、佛印側は自省したものか、屈服したものか、兎に角日本の要求を受諾した。それで六月二十五日日本から西原少將（一策）を長とする援蔣物資監視團が佛印に乘り込むことゝなつた。此の監視團はランソン（諒山）、ハイフオン（海防）、ラオカイ（老關）、モンカイ等の要所に夫々配置され、そして委員長西原少將は六月二十九日から當時の總督カトルー將軍、全佛印軍司令官マルタン將軍と三人で日本軍の北部佛印平和進駐に關する斷乎たる會談を開始したのである。

此の會談は甚しく難航であつた。何となれば此のカトルー將軍は獨佛戰爭の開始せらるゝや、今までの文官總督制の原則を破つて武官總督の初代として特に選ばれた硬骨將軍であれば幾度も決裂の危機に直面して一向進捗する氣配もなかつた。頑固一徹のカトルー將軍はペタン新政權の訓令を聽かないので七月二十日佛國極東艦隊司令官ドクー提督が代つて總督となるや、會談は稍々好轉の兆を示したが、彼等としては外國の軍隊を國内に入れることは佛蘭西の面目問題であるとし、且つ英、米の策動暗躍が露骨に行はれ、河内のマルタン司令官々邸で、最後の調印を行はうと云ふ九月二十一日の夜、深更まで會談は續いたが、其のどたん場に來て、決裂狀態に陷つて了つた。

そこで西原將軍は斷乎たる決意を示す外はないと、引揚げの決心で翌二十二日朝河内を去り海防（ハイフオン）

に來た所、佛印側は茲に始めて驚き、其の日の夕刻海防の宿舍で日佛協定の調印を見るに至つたのである。

それで愈々翌九月二十三日には日本軍の進駐が堂々と開始されたのであるが、約二箇月に亙る西原將軍の血のにじむやうな苦心と隱忍が銘記されねばならぬ。

其三　日佛兩軍衝突（九月）

前述の日佛協定に基き中村將軍（明人）の指揮する日本軍は廣西省から行動を起し九月二十三日から進駐を開始したのであるが、佛印當局からの命令不徹底のためか、此の進駐の途中、國境附近で日佛兩軍の衝突を見たのである。

龍州作戰以來我軍の第一線部隊は平而關、鎭南關、那窩附近にあつて國境を警戒してゐたが、九月二十一日那窩南方高地より突然約百五十の支那軍の襲擊ありたるにより之を擊退し翌二十二日には國境に接する愛店に進出して之を占領した。

今迄國境近くに陣して佛印の山河を睥睨し、佛印の態度を心憎く思つてゐた我軍は滿を持して其の進駐の機を今か〳〵と待つてゐた所に、二十三日午前零時「よし、進め」の命令が下つた。

箭は弦を放れた。皇軍は怒濤の如く暗を衝いて國境線を突破した。名は平和進駐とは云へ、日佛兩軍の始めての觸接のことなれば何時如何なる事件の突發なきを保せず、充分用意しての國境乘り越えであつた。之が國威を國際的南進に印した不朽の第一歩である。

果して佛印の守備軍から猛烈なる抵抗が起り、彼等の誇る新鋭兵器の威力は仲々侮るべからず。されど百錬の我軍は、かねて期したること〳〵て激戰數次忽ちにして之を擊退し午前八時頃には早やビンモウ、ドンダン、ロッ

の觸接のことなれば何時如何なる事件の突發なきを保せず、充分用意しての國境乘り越えであつた。之が國威を國際的南進に印した不朽の第一歩である。

果して佛印の守備軍から猛烈なる抵抗が起り、彼等の誇る新鋭兵器の威力は仲々侮るべからず。されど百錬の我軍は、かねて期したること丶て激戰數次忽ちにして之を擊退し午前八時頃には早やビンモウ、ドンダン、ロックビンの線に進出した。敵は依然抵抗を續けるので我が部隊は引續き攻擊して右翼部隊は二十四日チアトケを攻略した。

翌二十五日はランソン（諒山）の總攻擊である。ランソンは佛印から廣西省の南寧に通ずる要點に位し停車場ありて、佛印國境守備軍の據點となつてゐる瀟洒な田舍町で人口約七千ばかりの小都邑で、やゝ高原地帶に入つた地域である。其の先きのドンダンは國境から六キロも佛印側に入つた道路の兩側に民家の立ち並んでゐる單純な部落で、此處には佛印の稅關がある、鎭南關は國境に接した支那町である。

鎭南關及び愛店方面から進んだ部隊は二十四日の夜機動を開始し敵の抵抗を排除しつゝ、天明までに前者はランソンの北方並に西方から、後者は東方並に南方から、包圍態勢を執り、二十五日朝來引續き包圍圈を壓縮し、晝頃迄にそれを完成して逐次に敵陣地に近迫す、飛行隊亦出動して敵陣地の要部を爆碎した。

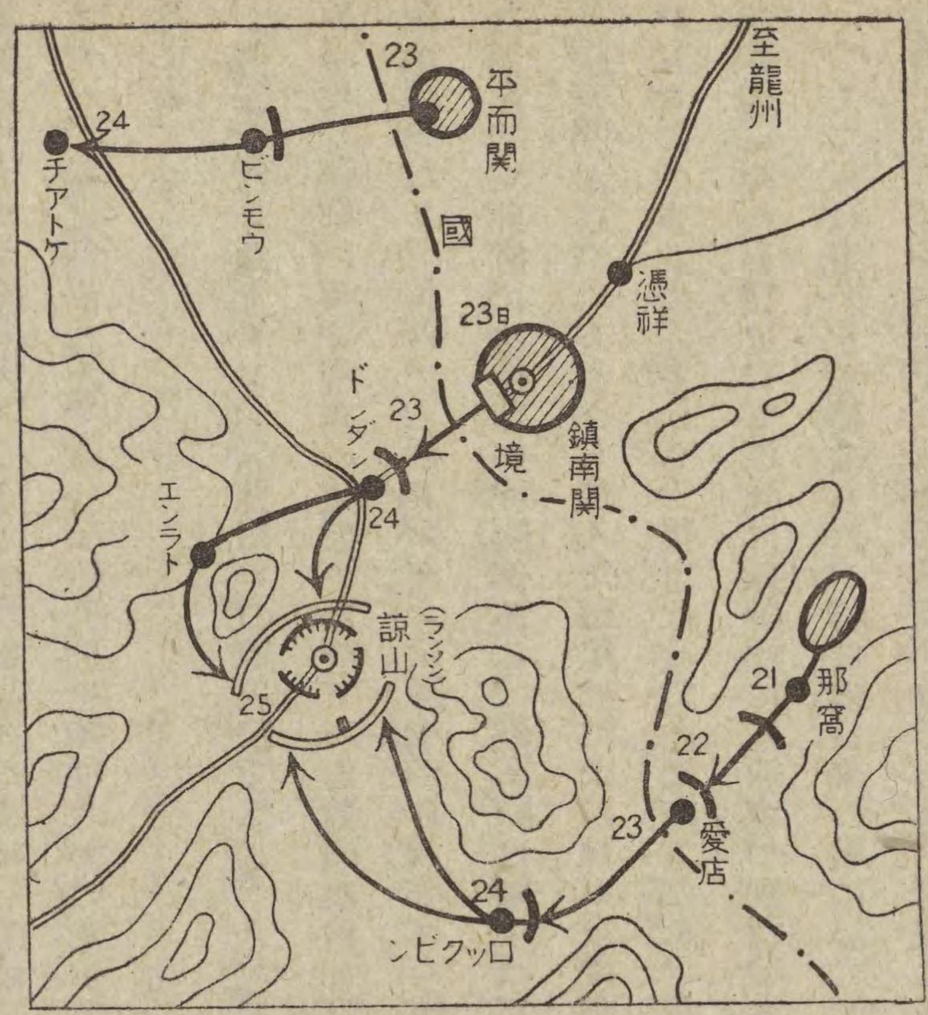
斯くて敵は退路を遮斷せられ、特に前日來の戰に於て我軍の眞價を知り、抗戰不能なるを悟り降伏するに至つたのである。時に二十五日十三時五十分である。諸隊は逐次ランソン市内に進入して敵の武裝解除を行つた。

以上の戰に於ける戰果は

一、佛印側、遺棄屍體四百七、投降兵約二千二百、遺棄兵器は戰車十三、各種砲約五十、機銃、小銃計約三

千二百、其他多數

二、日本側、戰死五十九、戰傷百九十四



日佛衝突

（九月二十三日）

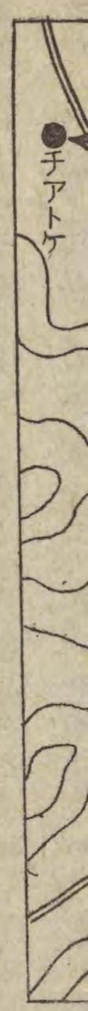
此の方面の局地的紛爭は佛印軍の降伏を以て終り爾後に於ける進駐は友好的に進捗した。二十四日以來我軍の一部隊は海防港より平和進駐を實施せんとしたが、矢張り佛印側はランソン方面に於けると同樣、誠意を缺き諸種の口實を設けて之が遷延を圖るので、我軍は二十六日未明敵の抵抗を豫期しつゝ海防南方地區に强行上陸を開始したが、敵の抵抗なく十三時平穩裡に海防に入城した。海防は人口約十三萬西貢に次ぐ北方の要港である。

海防に上陸した我が部隊は其の後佛印側との協定に基き十月五日河內（ハノイ）に、又有力なる部隊は十日河內の東方バクニンに進駐した。

其四　進駐後の狀況

あれほど頑迷であつた佛印が日本に聽從するに到つた裏面には、佛國の深刻な懊惱があつたことは、上述の日

有力なる部隊は十日河内の東方バクニンに進駐した。



海防に上陸した我が部隊は其の後佛印側との協定に基き十月五日河内（ハノイ）に、又

其四　進駐後の狀況

あれほど頑迷であつた佛印が日本に聽從するに到つた裏面には、佛國の深刻な懊惱があつたことは、上述の日佛印交渉の經緯からも推測が出來るであらう。此の點につき佛外相は率直に語つてゐる、「現在佛印には微弱の空陸海軍を有つてゐるに過ぎない。米英兩國は口筆では抗議して吳れるが、實質的援助を拒否した、それで佛國は屈せざるを得なかつた云々」と。之は正直な告白である。

日本軍の河内（ハノイ）進駐は、日・獨・伊三國同盟の成立（九月二十七日）と殆んど時を同じくし、國際的に大なる衝擊を與へた。日本の唱道する大東亞共榮圈確立は、これによつて一層明瞭な印象を世界に與へた。それは日本の企圖するところが、單なる日・滿・支の東亞新秩序ではなくして更に一段と飛躍したところの、佛印、蘭印を包含する大東亞共榮圈の樹立であることが、佛印進駐の實質的效果から一般に印象づけられるからである。

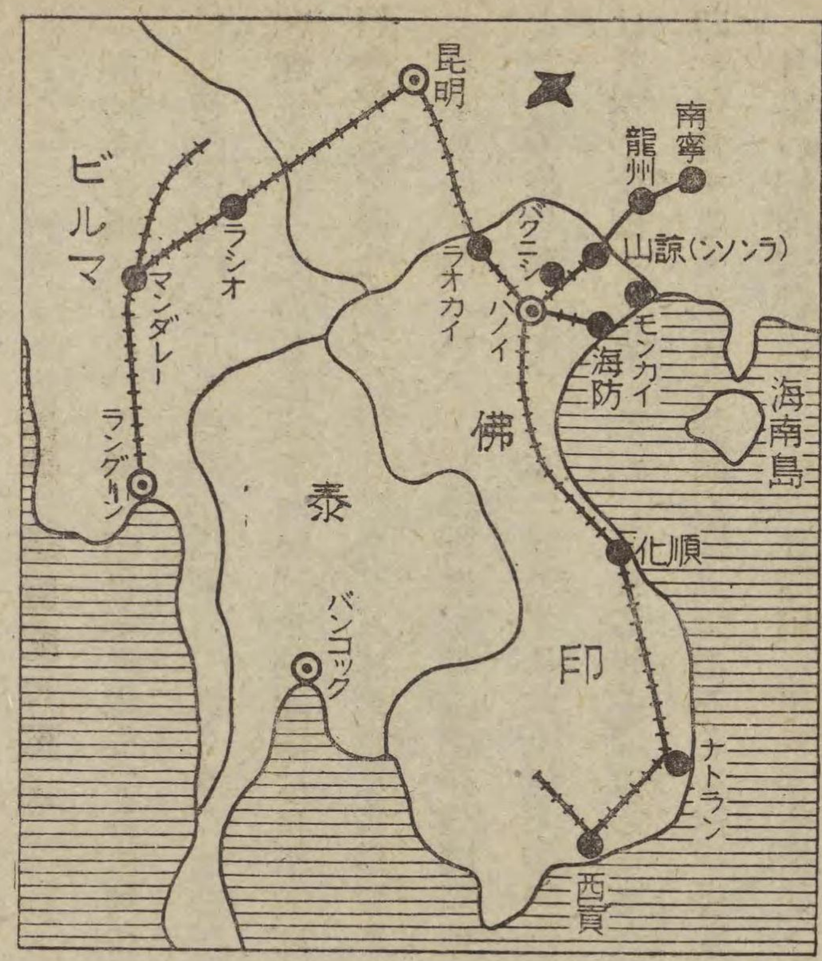
日本の佛印進駐には次の如き四個の重大なる價値と意義を有してゐる。

其の一は蔣政權に對する打擊である。是れまで佛印が蔣政權の對外ルートとして最も重要な役割を爲して來たことは殆んど言ふを要しない。海外から持ち運ばれる物資の約七〇パーセントは佛印を經由してゐた。それが日本軍の進駐によつて絶望となつた。

そればかりではない。今試みに河内を中心として六百哩の半徑を以て弧を西北に描くならば、ラングーン、マンダレー、ラシオ、昆明、重慶等の要地は完全に其の中に包圍される。即ち蔣政權の恃む唯一のビルマ・ルート

は其の起點から終點までが、完全に我が空爆圏内に入つて了ふのである。

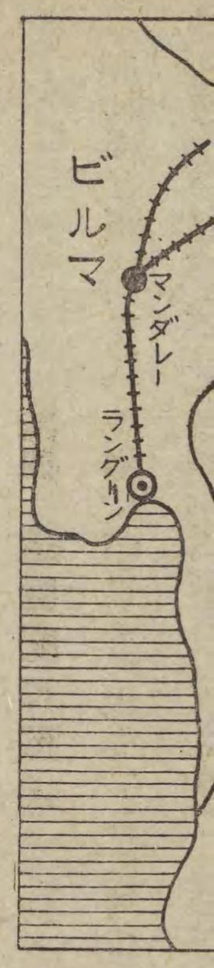
以上は重慶に及ぼす經濟的打擊であるが、軍事的には直接雲南への進擊が考へられる。それで重慶政府は日本軍が佛印に上陸するならば、支那も自衞上軍隊を佛印に派遣するであらうと聲明し、李宗仁を總大將とし副將として盧漢、黄琪翔、龍雲等の諸將を任命したが、佛印の反對に會ひ、且つ堂々日本軍の進駐を見て怖れたものか、一向進擊の模樣なく、九月中旬から佛印國境老開（ラオカイ）の鐵橋を破壞し、トンネルを爆破し、レールを取り外し專ら守勢を執つた。



佛印一般圖

其の二は佛印の性格の一變したことである。彼は今迄親蔣的であつたのを日本と協力提携せざるを得ない運命となつた。其の提携の程度は今後の問題であるが、兎に角兩者の間に經濟的協定が成立し、日本からは領土尊重の保障を與へられたので、佛印は眞面目に支那軍の佛印侵入を斷乎拒絶もするし、又日本との貿易關係は歐洲戰爭勃發以來惱んでゐた佛印の經濟的危機を救つたことゝもなつた。

其の三は泰國の自主獨立性の强化である。泰國は夙に日本に對して好意を有し、本年は特に友好的條約を結んだ。彼は佛國との不可侵條約を結んだのであるが、其の批准を拒否し九月に至るや佛印にある舊領の返還要求と



もするし、又日本との貿易關係は歐洲戰爭勃發以來惱んでゐた佛印の經濟的危機を救つたことゝもなつた。

其の三は泰國の自主獨立性の强化である。泰國は夙に日本に對して好意を有し、本年は特に友好的條約を結んだ。彼は佛國との不可侵條約を結んだのであるが、其の批准を拒否し九月に至るや佛印にある舊領の返還要求を突きつけた。

佛印は泰の要求を拒絶し艦隊をシヤム灣に集中して高壓態度に出でたが、泰も亦軍隊を國境に集結し、バンコックには民衆の反佛デモが行はれ、危機逼迫したが、日本の調停によつて平和に解決した。是等は日本軍の佛印進駐により自然泰國の地位を昂め、失地回復の意氣に燃えしめたものである。若しも此の進駐がなかつたならば、泰は英、米、佛威嚇の下に屈し其の陣營に引き入れられたかも知れなかつた。

其の四は南洋に對する日本の壓力の强化である。日本の南方發展は勿論平和的、經濟的のものであるとは云へ、作戰的地位が脆弱であるならば、南方發展も、大東亞共榮圈も恐らく實現することは出來まい。

南支那海に長き海岸線を持つ佛印と、其の背後に繫がる泰國とが、日本と親善關係に入ることゝなれば、フイリッピンは臺灣、南洋諸島、海南島、佛印によつて三方から圍まれる形となり、又太平洋の西の入口であるシンガポールは直接大なる脅威に曝されることゝなるのである。此の戰略的地位の强化こそ米國が眞劍に頭痛に病み出す所以であらう。それで米國は蔣政權に二千五百萬弗の借款を許し、日本に對し屑鐵、鋼の禁輸を發表して經濟壓迫の强化に乘り出したのである。

以上のやうに日本軍の佛印進駐は日本にとつては蔣政權の打擊と南方發展とに偉大な效果を寄與したものであ

る。

【進駐の強化】 昭和十五年九月皇軍の海防進駐以來、佛印と日本との關係は其の後一層緊密となり、泰佛印紛爭の調停（昭和十六年三月）、日佛印通商協定の成立（同五月）等によつて佛印は東亞共榮圏の一環を擔ふ方向へ進んだ。

然るに南部佛印の西貢を中心とする一般の空氣は兎角英米の策謀に乘ぜられて反日的に傾くので日本に於ては佛印との間に共同防衛について協議し、其の結果、昭和十六年七月二十一日協定成立して調印を了するに至つた。かくて日本軍の更に南部佛印への進駐が行はれたのである。

七月二十九日最高指揮官飯田中將の率ゐる輸送船團は南支那海の曉雲を背にして西貢に向ふ。此の護送の任に當つたのは新見海軍中將であつた。かくて佛印の官民歡迎裡に上陸せる諸部隊は西貢及びナトラン方面各地に進駐した。

西貢附近に進駐した日本部隊が毅然として、マレー、シンガポール、蘭印を睥睨することは論を俟たぬ。凡そ戰略的要衝は、戰に取られてから騷ぐのは愚の骨頂である。佛印に關する限り、日本が英・米・蔣等の策謀に先手を打つたことは痛快と云はねばならぬ。

後手に廻つた英・米・蔣合作陣は雲南、ビルマ、マレーの各方面から佛印並に泰の國境に大軍を動かして戰備を整へたが、泰國は其の恫喝にも恐れず斷然嚴正中立の態度を闡明した。

茲に於て米英側は對日資産凍結を實施し、强硬なる態度を以て日本に挑戰し來たり、蘭印、蔣介石等と共に所謂ＡＢＣＤ同盟（Ａアメリカ、Ｂブリデン、Ｃチャイナ、Ｄダッチランド）の對日包圍陣を作つて日本に重壓を

後手に廻つた英・米・蔣合作陣は雲南、ビルマ、マレーの各方面から佛印並に泰の國境に大軍を動かして戰備を整へたが、泰國は其の恫喝にも恐れず斷然嚴正中立の態度を闡明した。

茲に於て米英側は對日資産凍結を實施し、强硬なる態度を以て日本に挑戰し來たり、蘭印、蔣介石等と共に所謂ＡＢＣＤ同盟（Ａアメリカ、Ｂブリデン、Ｃチャイナ、Ｄダッチランド）の對日包圍陣を作つて日本に重壓を加へて來たのである。之に對し日本に於ても期する所あり、八月二日兵を西貢方面に增派して之を西方國境まで前進せしめ、九月二十一日には佛印總督ドクーは佛印の防衛並に經濟的打開は日本に依存する外なしと强調し、十月には日本から資源調査團を佛印に派遣する等、日本と米英との間に漸く緊迫の度が加はり來たり、遂に十二月八日の開戰となつたのである。此の日、日佛印軍事協定が成立し、三日の後には日泰攻守同盟條約が締結の運びとなつて愈々日本の陣營は强固となつたのである。

其五　評　論

支那事變の名の下に戰爭を行つてはゐるが、平和主義の日本は成るべく事を平和的に解決せんと、佛印側に援蔣物資の輸送中止方を要求した。佛印側は之を承知しながら實行しない。當時彼の思惑では日本何するものぞと多寡を括つたのであるが、其の內日本援助の下に汪政權が出來るし、佛本國は獨の軍門に降り、廣西省の要衝南寧は陷り國境近くの龍州も日本軍の手に入り、重慶の玄關口である宜昌も陷り、日・獨・伊三國同盟が出來、その上泰國までが威張り出して來たから、佛印としては南風競はず悲報交々到ると云ふ有樣であつた。かうなつては流石の佛印も恃むべからざる英米の力を恃む譯にも行かず、自力を以て自己の運命を決せねばならぬ破目に陷つた。つまり何處までも日本に抗して援蔣を續くべきか、日本に屈して一時たりとも自己の安全を圖るべきかの十

字街頭に立つたのである。抗するか、屈するかの二つだ。

抗せんとするも力なし、屈するは恨めし、おめ〳〵屈するも佛國の面目を如何せん。されど愚圖々々すると、日本は實力を以て佛印に侵入せんとするの權幕でもある。よつて此の際一時たりとも其の鋭鋒を避くるに如かずと、日本に對し次の如き申開きを通じた。「佛印は援蔣物資を輸送してゐないのであるが、それを日本が疑ふならば來たりて監視し給へ」と半ば屈したやうな厭味ある言ひ分であつた。そこで日本の監視團が佛印に乘り込んだのである。

其の內國際關係が漸次重大化して來て、日本軍の佛印進駐と云ふことが問題となつて來た。勿論日本の申出では平和進駐であるが、佛印としては自國內に外國の監視隊を入れることさへ不名譽と思つた所へ、日本軍の進駐とあつては佛印の面目丸潰れと憤つて見たが、四圍の情況上如何ともする能はず、憾みを呑んで進駐を許したものゝ、恨みの一矢とでも云ふか、くやし紛れに國境で一つ抵抗して見たが、劣弱の哀れさ一擊の下に粉碎され武裝解除の憂き目を見たのである。

それでも當時の進駐は北部佛印だけの區域であつて、全佛印ではなく、聊か自らを慰め得たが、時局は日一日と進轉して遂には南佛印にも日本軍の進駐を見るに至つたのである。而して佛印總督は「我等は日本に賴る外なし」と聲明するに至り、其の後間もなく大東亞戰爭となり佛印の位置は此の戰爭遂行上大なる役割を負擔するに至つたのである。

以上を要するに佛印は始め傲慢以て日本を侮り、次に日本を疑ひ、次に日本に屈し最後に日本に媚びるに至つたのである。佛印總督は最後に「日本に依存す」、「日本に信賴す」と云ふやうな言辭を吐くも、それは唯一種の

し」と聲明するに至り、其の後間もなく大東亞戰爭となり佛印の位置は此の戰爭遂行上大なる役割を負擔するに至つたのである。

以上を要するに佛印は始め傲慢以て日本を侮り、次に日本を疑ひ、次に日本に屈し最後に日本に媚びるに至つたのである。佛印總督は最後に「日本に依存す」、「日本に信賴す」と云ふやうな言辭を吐くも、それは唯一種の外交辭令であつて、衷心からの日本倚信ではないのである。其の內大東亞戰爭起るに及ぶや、依存、信賴の言葉は媚態となり、虫も殺さぬ柔順さとなつた。唯夫れ外面女菩薩の柔順さであつて、衷心から一切を擧げて東亞共榮圈の陣營に命を投じ共苦同甘の聖業に殉ずるの誠意あるや否やは今後の問題に屬する。畢竟するに佛印の斯くの如く始めは鬼の如く、終りに處女の如くなつたのは、其の實力の寡弱にもよるが實は世界の大勢を知らざるの致す所。一體今度の國際問題に就き、時勢を誤斷したのは英、米も左ることながら、佛國は其の最も甚しきものであつた。彼若し尙ほ將來を誤るならば佛印の運命知るべきである。

日本の佛印に對する態度は終始一貫の平和主義であつた。日本の力を以て佛印を取る或は廣東を取るよりも易し。取らんか監視團派遣の必要もなく、進駐會談の面倒もなく、思ふ如く南方作戰を遂行し得たのである。されど佛印には主權がある。敢て犯さゞるは日本の行動法則である。故に辭を盡くして彼の不理を說き、隱忍して彼の反省を求め、愈々聽かざるに至り少しく威を示し、彼從へば我れ和し、進駐すればとて寸毫も犯さず依然として平和的である。彼の心中尙ほ未だ解けざるものあらんも我れの眼中には旣に敵なく唯一視同仁あるのみである。彼忤らはんと欲するも遂に得ず、恰も大盜袴垂の保昌に於けるが如く、安部宗任の八幡太郎義家に於けるが如くであつた。日本の此の信が認められ、此の義が報ひられて、佛印は大東亞戰爭に日本に大貢獻する存在とな

つた。

若しも佛印が力を以て日本に抗せんか彼は既に亡んだであらう、日本が力を以て佛印を取らんか、佛印は今日の如く日本に忠でなかつたかも知れぬ。兩者共に力の價値を知れるもの、史の參考に供するに足る。

第七節　評論

本年度に於て日本軍の行つた作戰は後述する如く數十の多きに上つたが、其の內最も大なるものは宜昌作戰であつた。此の作戰は構想の雄大と云ふよりは痛快と云ふ方が適當である。

作戰の外に於て銘記すべき重要な事件は汪政權の樹立、佛印進駐の二つである。更に國際的方面から眺むれば日・獨・伊三國の同盟締結、佛軍の獨逸軍門への降伏であつた。是等の事件は直接間接支那事變に影響したことは云ふまでもない。

以上は日本に好條件の事柄であるが、其の反面には英・米・支の對日敵性が益々硬化し、取わけ案外なのは蔣政權の仲々衰へないことである。彼は尙ほ未だ約二百萬の軍隊を有し、連戰連敗、常に戰場に遺棄屍體何萬何千と云はれながら其の命脈を保つてゐるのは不思議な位である。英米は開戰以來獨伊潛水艦の爲め船舶を擊沈され、其の補充に窮してゐるのに、蔣介石の方では、いくら殺戮されても尙ほ依然として其の權威を保持してゐる所を見ると、支那は全然現代的國家と其の類を異にしてゐる點があるやうだ。英國あたりでは國民は戰敗を聞いては壯

其の補充に窮してゐるのに、蔣介石の方では、いくら殺戮されても尙ほ依然として其の權威を保持してゐる所を見ると、支那は全然現代的國家と其の類を異にしてゐる點があるやうだ。英國あたりでは國民は戰敗を聞いては壯丁を出さないと騒ぐのであるが、支那國民の間にはそれがない。此の點が蔣介石に至上の僥倖であると共に、茫漠たる支那の特色とも云ふべきである。拂へども〳〵又來る夏の蒼蠅、之を相手に戰ふ日本軍の勞苦は並大抵なことではない。百萬の敵は恐るゝに足らぬ。我れ進めば退き、止れば止り、歸れば追ひ來たると云ふ支那軍、實以て五月蠅き存在である。

上海落ちたならば兜を脱ぐだらう、南京陷らば手を擧げるだらうと思はれた蔣政權が徐州に敗れ、武漢三鎭は愚か廣東まで攻略されても尙ほ參らずに重慶に退いて、「此處まで來たれ」とばかりに嘯いてゐる。

彼は他力主義の政策に生きてゐる。それで廣東を取つて外來の輸血路を絶たば窮するだらうと思へば、彼は佛印ルートに依りて生命を繋ぐ、さらばと佛印進駐を斷行すれば、彼は緬甸ルートを開いて更生を圖る。一の手から二、二から三の手と窮通の策を廻らして兎に角空爆下の重慶に生きてゐるのは、生きた屍のやうな存在ではあるが、仙術でも通はせてゐるかに見える。

蔣介石は日本の差し出した平和の手を排し、汪兆銘の事理を盡した平和の辭を斥け、今日まで足掛け四年の戰を續けて連戰連敗し、しかも尙ほ戰を續けんとするのは、何か其處に見る所があつてのことか。思ふに彼も一個の男子であり、一度は支那近代の大英雄として崇められた偉丈夫である。空しく日本に屈せんよりは、何等かの好機を捉へて其の面目を立てようと苦慮してゐることであらう。幸ひに今や第二世界大戰が歐洲に起り天下の形勢に異變を呈して來たのであれば、此の機に乘じ奇手を以て日本を打倒するか、若しそれが成らずとも面目を損

せざる程度に於て日本と妥協しよう位の考へを以て戰ひつゝ世局の推移を見てゐるのではあるまいか。それで連敗の恥を忍びながら虚勢を張つて一縷の望みを前途に懸けてゐることであらう。

今其の本年度に於ける敵連敗史の一端を繰り擴げて見る。（附圖參照）

月	北支	中支	南支
一	●五原作戰 南曠作戰 平高作戰	●宜昌作戰 浙東作戰 信陽作戰	●翁英作戰 欽寧作戰
二	●五原作戰 威縣作戰 山東半島作戰	●宜昌作戰 浙東作戰 溧陽作戰	欽寧作戰 潮汕作戰 海南島作戰
三	●五原作戰 大名作戰 南口西方作戰	信陽作戰	潮汕作戰 海南島作戰
四	晉南作戰	宜昌作戰 青陽作戰 通山作戰	
五	晉南作戰 鄉寧作戰 五臺作戰	●宜城作戰 宜昌作戰 江北作戰	良口作戰
六	晉南作戰 冀南作戰 西北山西作戰	●宜昌作戰	龍州作戰 良口作戰

備考	十二	十一	十	九	八	七	六
●以上は作戰と名のつく戰であつて、此の以外に各地の討伐は絶えず行はれた。●印は比較的重要な作戰である。	壽縣作戰 西方山西作戰	壽縣作戰 大谷作戰 淶源作戰	壽縣作戰 五定作戰 大谷作戰	壽縣作戰 晉南作戰 安北作戰	壽縣作戰	冀南作戰 榆社作戰 西北山西作戰	晉南作戰 冀南作戰 西北山西作戰
	彭澤作戰	江南作戰 安陸作戰	沂州作戰 江南作戰	沂州作戰	●三河作戰	通山作戰	●宜昌作戰
		欽寧作戰		佛印作戰	增城作戰	龍州作戰	龍州作戰 良口作戰

五
鄉寧南作戰 五臺作戰
●宜昌作戰 江北作戰
良口作戰

以上の如く本年度は前年同様、戰は多かつた。しかし今後は益々多くなるであらう。何となれば此の支那事變の續く限り蔣介石側は相變らず連敗の繼續であらう。蔣軍の連敗は英米の戰爭熱を益々强くさせるからである。英國は勿論のこと、此の十月十二日に米國大統領ルーズベルトは「米國は軍備の擴張を續けると共に、侵略日本に對し抗戰しつゝある蔣政權を援助するであらう」と宣言した。又米國のノックス海軍長官は十一月十一日の休戰記念日に「吾人は日・獨・伊の脅威に對し、それ以上の脅威を以て回答するであらう」と放言した。そして其の言の終ると共に、屑鐵禁輸、鋼鐵禁賣、對蔣借款、極東米人の引揚、陸海空軍の戰備推進、太平洋防備、英、濠との折衝、資金凍結等々の無言回答は次から次へと發せられた。彼は本氣に戰ふ氣であるのか、又はそれで威嚇して見る氣なのか、何れにしても日本としては覺悟を固めねばならぬ、覺悟は固よりの事であるが、昭和十五年の末期に於ける世界の狀勢を四顧して見て特に此の覺悟を要する。覺悟とは何んぞ、敵は蔣介石にあらずして英米であると云ふ覺悟、そして此の英米を打倒するまで戰ひ拔かうと云ふ覺悟である。

英米の軍擴や威嚇は恐るゝに足らぬ、それと同時に日・獨・伊三國同盟が結ばれたとて安心してはならぬ。同盟のみに依賴しては自主獨立を完うすることは出來ない。古今の歷史は之を證してゐる。三國同盟は或る意味に於て日本の苦難への發足であるかも知れぬ。九月二十八日の放送に近衞首相は三國同盟の意義重大なるを述べたる後、「今や我々は有史以來の一大國難に直面した、我々の前途には民族の運命を賭すべき重大問題が横たはつて居る、全國民は結束して此の難關を突破せねばならぬ云々」と演說された。固より當然のことで覺悟の前である。

要するに戰に勝たねばならぬのだ。

【戰爭と人道】　支那事變を單に普通歷史にある戰爭位と思つてはならぬ。此の戰爭の頁の裏には驚くべき事實

後、「今や我々は有史以來の一大國難に直面した、我々の前途には民族の運命を賭すべき重大問題が横たはつて居る、全國民は結束して此の難關を突破せねばならぬ云々」と演說された。固より當然のことで覺悟の前である。

要するに戰に勝たねばならぬのだ。

【戰爭と人道】 支那事變を單に普通歷史にある戰爭位と思つてはならぬ。此の戰爭の頁の裏には驚くべき事實がある。それは戰場に遺棄した敵の屍體は、驚く勿れ事變以來約百九十萬、ざつと二百萬と云ふ數である。

古今の戰史を見るに三年有半の間に二百萬の死屍を戰場に遺棄したと云ふ慘澹な戰爭は未だ曾つてないことだ。昔カルタゴの落城や、西班牙人の中南米遠征の時には隨分無殘な殺戮が行はれたが、それは戰と云ふよりは無抵抗者に對する虐殺の方であつて比較するに足りない。

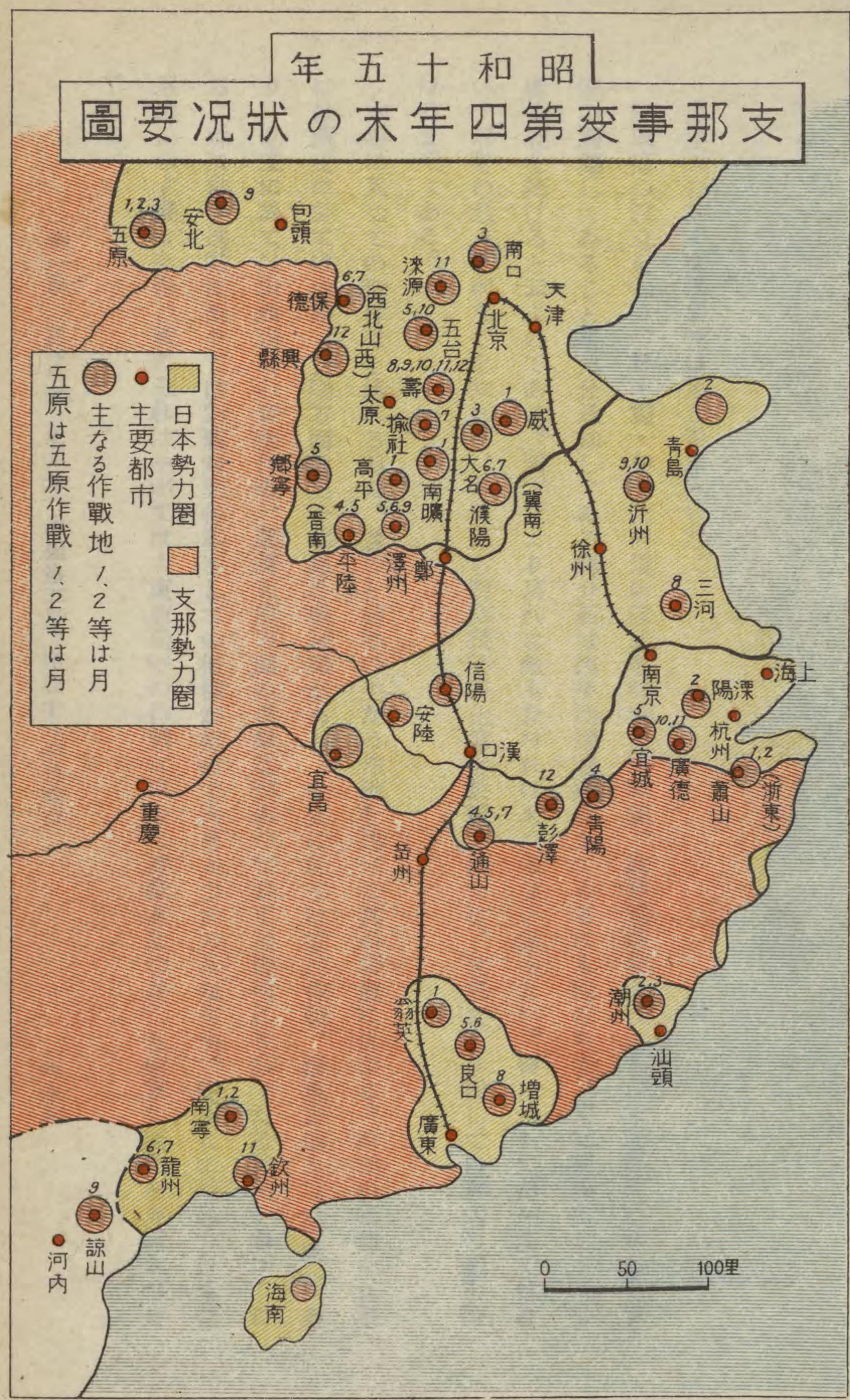
それに對し我が方の犧牲者は事變以來約十萬（張鼓峰、ノモンハン兩事件を含む）である。二百萬と十萬、餘りにも懸隔が甚だしい。其處には勿論戰略戰術の巧拙があり、武器の精粗があり、訓練の熟否があつて一は連戰連敗し、一は連戰連勝した結果、斯くの如き懸隔を生じたに相違あるまい。しかし茲に言はんとする所のものは戰略問題や政略問題を云ふにあらずして人道問題である。世界人は只々轟々たる戰爭の爆音に魂を奪はれて此の人道問題に無關心であるのはどうしたのか。

蔣介石にして一と度び眼を茲に注がんか、彼は小さな名譽心に驅られ虛榮に趨り、或は英米の煽動に乘つて、此の有害無益の戰爭を繼續するの愚を悟るであらう。然るに彼は態と眼をつむり顏をそむけて此の二百萬の死屍を見ざらんとす、彼の心既に人道の光を失つてゐる。彼は遂に開眼歸神せざるのか。彼にして茲に悟るならば日支の戰は忽ち熄むであらう。

日本は初めより平和の手を伸べ、天業の至聖を說いて彼に臨む、彼悟らざるを以て已むなく降魔の劍を鞘より拔く、固より戰を欲する者ではない。二百萬の死屍、是れ日本の彈丸によつて斃れたものにあらずして蔣介石の狂刄によつて屠られたもの。然るに彼は其の醜屍を撮影して日本の惡虐無道なる所行なりと宣傳して益々己の非理を遂げんとす、茲に逆運重ね來たりて二百萬の死屍が報ひられ、之に反し日本は敵屍を厚く葬りて人性の眞美を示す。茲に天佑頻りに臻りて戰爭は益々勝ち國光は愈々揚がる。此のやうな哲理的論議は閑人の囈語であつて、現實な戰爭には無緣のものと貶する者あらんも、決して然らず。古來幾多戰爭の跡を討ぬるに、世人の所謂理外の理なるものがある。しかし其の理外は理外にあらずして眞理の含まれてゐることに注意すべきである。

戰爭により蔣介石を屈するは固より一法たるに相違ない。されど人道を說いて彼を悔悟せしむる亦良法たるを失はない。其の人道を說くには孔孟の敎へを口にするよりも二百萬の死屍を指して、「ソモ是れ奈何」の一喝を彼に與ふるの優れるに若かずや。

附圖第十五


昭和十五年
支那事変第四年末の状況要圖
日本勢力圏
支那勢力圏
主要都市
主なる作戰地 1、2等は月
五原は五原作戰 1、2等は月
五原
安北
包頭
南口
天津
北京
滦源
五台
德保
(西北山西)
縣興
壽
太原
榆社
威
大名
濮陽
(冀南)
鄉寧
高平
南曠
(晉南)
平陸
澤州
鄭
徐州
沂州
青島
三河
信陽
安陸
漢口
南京
溧陽
杭州
海上
宜城
廣德
蕭山
(浙東)
宜昌
重慶
彭澤
青陽
通山
岳州
潮州
汕頭
梧州
良口
增城
廣東
南寧
龍州
欽州
諒山
河內
海南
0
50
100里

第八章　事變第五年、昭和十六年の戰局

第八章　事變第五年、昭和十六年の戰局

光陰矢の如く支那事變は第五年に入つた。

汪政權の設立を知り、日・獨・伊三國同盟の成立を知つた蔣政權、援蔣路遮斷のことも、重慶陣營に厭戰の氣運の醞釀してゐることも充分承知してゐる蔣介石は四年間連戰連敗してゐるにも拘はらず、頑冥執拗にも又本年度も戰を續けると云ふのである。天下之より哀れな敵もなければ又うるさい敵もない。彼は決して愚妄漢ではない。形勢の愈々不利なるを知れど、英米から對蔣援助强化論を放送されては、元氣を取り戻して自棄的の戰を續けるまでゝある。

本年に入つての新作戰を述べる前に、ざつと前年の主なる作戰を述べて其の參照に供する。前年の昭和十五年には南支に於ては南寧、賓陽方面敵三十個師の殲滅戰があり、中支に於ては宜昌作戰、浙東方面の掃蕩戰があり、北支に於ては山西南部の晉南作戰、蒙疆五原方面の進擊等があつて我軍は皆何れも赫々たる戰果を擧げてゐる。殊に佛印進駐に至りては對蔣封鎖作戰としての價値が極めて大きかつたのみならず、安南人に始めて皇軍の恩威を示す機會を得、殊にそれはやがては大東亞戰爭の作戰に偉大な貢獻となつたことは寔に天佑とも云ふべきである。

本年度も前年同樣、作戰の名のつく大小の戰は約三十も行はれてゐる、しかし其の戰場の多くは是れまで幾度か敵を掃蕩した古戰場とも云ふべき地域である。それは我軍が一と度び敵を討伐掃蕩して原駐地に歸ると、敵は何時とはなしに、孤鼠猫の如くに又蒼蠅の如くに再び其の後に群り來り又々民衆を苦しめ我軍の妨害をなすのであるから、幾度も同じ討伐を繰り返さねばならぬと云ふ有樣であつて實に五月蠅き存在の敵である。

今左に本年（昭和十六年）に於ける作戰を概示して見る。

支那事變第五年（昭和十六年）の作戰一覽

作戰名	月	摘要				
		敵兵力	遺棄屍體	捕虜	分捕砲	分捕小銃
西方作戰	十二月——一月	一萬六千	一千七百	六百	一	五百
陸水作戰	一	二萬	三千三百	三百		三百
豫南作戰	一——二	十萬	一萬六千	一千百	十七	三千二百
蘇北作戰	二——三	五萬	三千	一千	十五	二千
晉南作戰	三	五萬	四千二百	三百	十一	八百
淮南作戰	三	二萬	三千	百	一	五百
錦江作戰	三——四	七萬	九千	八百	十二	一千
太湖西方作戰	三	五萬	二千	二百	三	五百

錦江作戰	三——四	七萬	九千	八百	十二	一千	
太湖西方作戰	三	五萬	二千	二百	三	五百	
香韶作戰	二	遮斷作戰					
雷州作戰	三						
汕尾作戰	三						
粵東作戰	三						
浙東作戰	四——五	十萬	一萬	一千四百	三十一	四千	
福建作戰	四——五	二萬	一千三百	六百	四十五	一千	
中原作戰	五——六	二十五萬	五萬	三萬	百八十	一萬	
江北作戰	五	九萬	七千	三百	七	一千五百	
東江作戰	五	二萬	二千	一千	二	四百	
冀東作戰	五——六	二萬？	一千五百	百		八百	
第一期清鄉	七		三百	二千五百	六	六百	
對新四軍作戰	七——八	一萬	一千七百	二百		七百	

晉南作戰	三	五萬	四千二百	三百	十一	八百	
淮南作戰	三	二萬	三千	百	一	五百	

潛江作戰	七——八	三萬？	四千			
晋察冀作戰	八——一〇	五萬	六千	三千五百	五	二千
江南反擊作戰	八	三萬？	二千			
第一長沙作戰	九——一〇	五十萬	八萬	八千三百	百五	一萬三千
北西江作戰	九——一〇	五萬	六千	七百	四十	二千五百
博西作戰	九——一〇	四千	三百	七百		
沁河作戰	九	二萬	二千	五千	十	千二百
鄭州作戰	一〇	十二萬	五千	三百	五	八百
魯南作戰	一〇——一二	五萬				
汾西作戰	一〇——一二	一萬五千？				
第二長沙作戰	一二——一	二十五萬	五萬五千	二千	七十五	六千
備考	一、本年即ち昭和十六年に於ける敵の遺棄屍體約三十五萬、捕虜約十萬、鹵獲火砲約七百門、重輕機約三千五百挺、小銃約十萬挺、其他多數、 二、我が方の損害、戰死約九千五百					

大體以上のやうであるが其の内主なる作戰若干を述べる。

第一節　豫南作戰（一月—二月）

大體以上のやうであるが其の內主なる作戰若干を述べる。

第一節　豫南作戰（一月—二月）

支那軍は舊臘以來所謂「正月攻勢」なるものを企圖し各方面に向ひ活動せんとするの兆候があつた。其の內襄西地區（漢水西方）に在つた湯恩伯の率ゐる有力なる第三十一集團軍（第十三軍、第八十五軍を主とす）約十萬は第五戰區たる信陽北方地區に移動し、それが將に完了と云ふ時機であつた。

我軍は此の機に乘じ敵を擊破し其の抗戰企圖を破摧すべく飛行隊の緊密なる協同の下に一月二十五日信陽附近より一齊に作戰行動を開始した。此の行動に先だち、江北兵團をして襄陽方面に陽動して敵を該方面に牽制するに努めしめた。

我が進攻軍は三つに分かれ、中央兵團は機甲部隊を合せ加へ京漢線に沿ひ北進、明港、確山、遂平等を次々に攻略し、二十九日には早くも上蔡、西平の線に進出して湯恩伯軍の中央を壓迫した。

左翼兵團は京漢線西側地區を前進し、大別山系の嶮峻なる山岳地帶に據る敵を攻擊し、泌陽、春水等を攻略し三十日には敵第十三軍張軫の本據舞陽を奪取して更に其の北方に進出した。

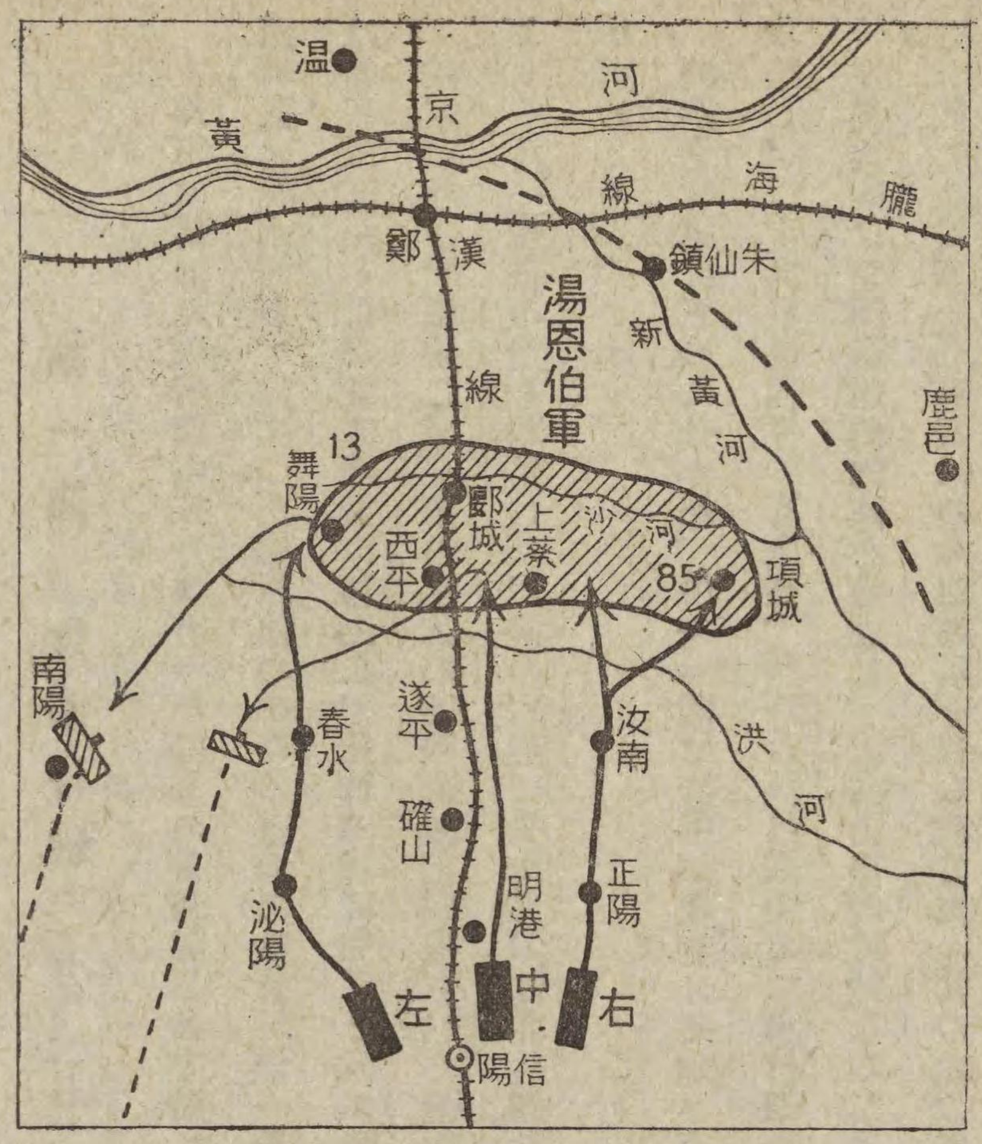
右翼兵團は京漢線東側地區を前進し、正陽、汝南にある敵を攻擊し、三十日には汝南北方の地區に進出した。

又我が快速部隊は電擊急進して二月一日第八十五軍李楚瀛の本據項城を奪取して敵を震駭せしめた。

更に隴海、津浦沿線方面にある我が他の兵團は本作戰に呼應して敵何柱國軍及び孫桐萱軍に對し一齊に攻擊を開始し敵を急追しつゝ一月三十日には溫縣、朱仙鎭、鹿邑西方の線に進出して敵を新黃河の線に壓迫した。

かうなつては鄭城を中心として抗戰しある湯恩伯軍は南方及び東北方の二方面から包圍せられる態勢となり、猛烈なる我が進攻部隊の攻擊に會ひ沙河と洪河との中間地區に於て殆んど殲滅的打擊を受け辛うじて其の大部は西北方に潰走した。

此の時敵の急援隊が頭を出した。それは孫連仲の率ゐる第二集團軍（第五十九軍、第六十八軍を主とす）にして西南方から前進し來たりて我が左側背に迫まつた。我軍の一部は直ちに反轉して之を迎擊し奮戰の上、二月四日敵第五十九軍をば敵中堅軍の本據南陽附近に於て潰滅せしめ、他の第六十八軍をば春水附近に於て擊破した。

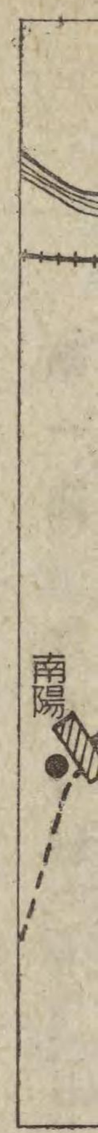


豫南作戰

（一月——二月）

斯くの如く敵の根據を蹂躪して所期の目的を達成した。此の戰は一月二十五日より二月五日頃迄に其の大體を

直ちに反轉して之を迎擊し奮戰の上、二月四日敵第五十九軍をば敵中堅軍の本據南陽附近に於て潰滅せしめ、他



が左側背に迫まつた。我軍の一部は西南方に前進し敵を我

の第六十八軍をば春水附近に於て擊破した。

斯くの如く敵の根據を蹂躪して所期の目的を達成した。此の戰は一月二十五日より二月五日頃迄に其の大體を終つた。其の兵力は敵は約十萬、我れは約其の四分の一の劣勢にも拘はらず、多大の效果を擧げ、戰場に遺棄した敵の屍體約一萬六千、捕虜約千百、各種砲十七門、小銃約三千二百等を獲た。

本作戰地域は河南の大平原であつて、其の廣さは東西約八十里、南北約百里に亙り正に我が關東、中部兩地方を合したものに相等しく其の戰線は九十里であつて今次の歐洲大戰に於ける伊太利、希臘軍の戰線七十里を凌駕してゐる。此の廣大なる戰場に於て我軍は零下十五度の極寒を冒し二十五日信陽を發し、二十九日西平附近に進出する四日間に行程約百八十吉米、一日平均約十里を突破してゐる。

此の戰は敵の隊勢の未だ充分整はざるに乘じ機先を制し疾風電擊的に包圍攻擊を强行して成功した模範的のものである。

第二節　浙東作戰（四月—五月）

重慶抗日政權の海外密輸入路封鎖の爲め、本年になつてから二月には香韶ルート遮斷作戰、三月初めには雷州作戰、同月下旬には汕尾作戰等の封鎖作戰が行はれたが、今また殘る浙江方面に對する作戰が行はれた。

【杭州南方の狀況】　杭州の南を流るゝ錢塘江の南方には敵の第三戰區司令官顧祝同の指揮する軍隊及び抗日自

衛團が、支那經濟の中心地浙江財閥の根據地によつて、我軍に抵抗してゐた。此の敵を擊破する目的を以て我軍は四月十六日早朝から作戰を開始した。

此の方面の作戰は浙江沿岸に上陸して敵の輸送路を覆滅し併せて利敵物資を押收せんとする我が一兵團の作戰を容易ならしめるのが主なる目的であつた。

それで杭州から前進した我が兵團は蕭山並に浦陽江に沿ひ水陸並び進み嶮峻なる山地によつて抵抗する敵を擊破しつゝ、二十日朝諸暨を攻略し、諸方から蝟集し來たる敵軍を擊破して多大の物資を押收した。

諸暨は漢代からの古い城鎭で、浙贛鐵道開通以來活氣を呈し、事變以來我が陸海軍飛行機の爆擊目標となつてゐた。

一方別に水上機動により錢塘江の河口にある瀝海に上陸した諸部隊は十七日紹興を占領し、又我が飛行隊は十六日以來爆擊を實施して多大の打擊を敵に與へた。

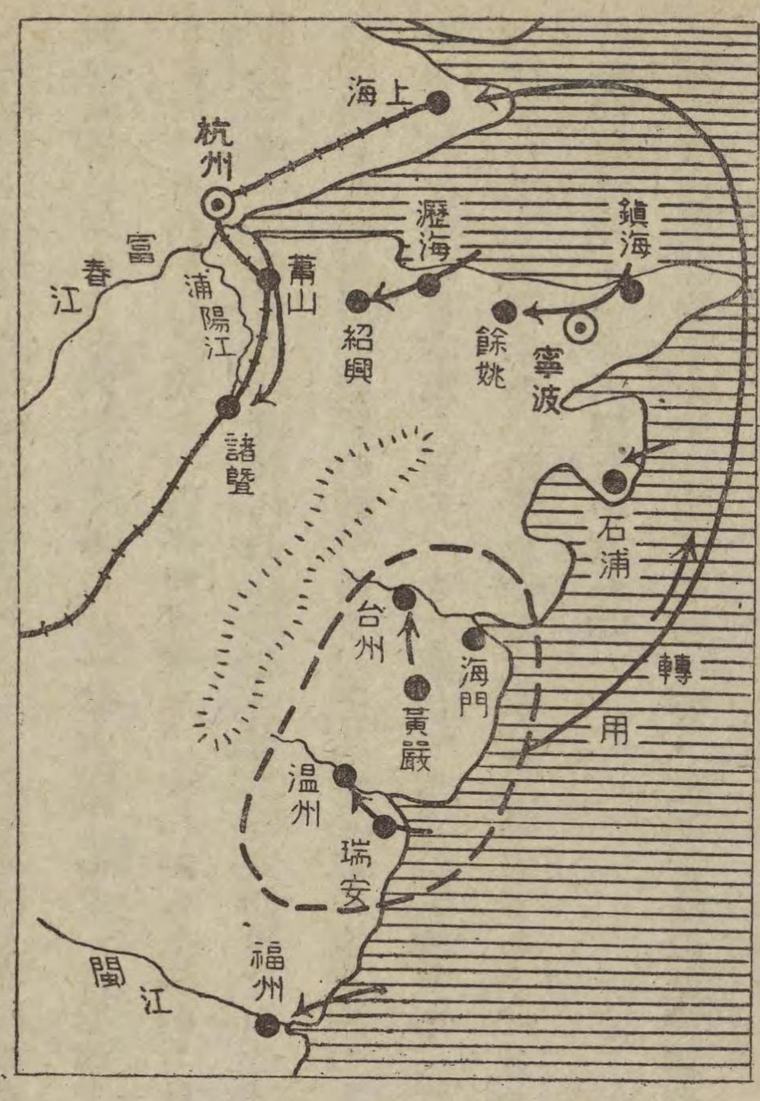
【浙江沿岸の上陸】　以上の如く杭州南方に攻擊作戰を行ひつゝある間、東支那海を航行しつゝ待機中であつた我が兵團は十九日朝浙江省東海岸の要鎭、鎭海、石浦、海門、瑞安、福州等に對し急襲上陸作戰を敢行した。上陸正面實に五百吉米に亙つた。當時風速二十米で波荒く殊に簡單なる海岸要塞もあるが我が陸海軍は飛行機協力の下に何れの上陸も皆成功した。

鎭海附近に上陸した部隊は敵の同地守備隊を擊破して前進、寧波、餘姚を占領した。寧波は人口四十萬內外、浙江財閥の中心根據地で、我國とは早くから貿易してゐた。浙江省第一の海外輸送路である。秀吉が東亞征服の大作戰を樹てた時、此の寧波に大本營を設けて呂宋、馬來、瓜哇、安南、暹羅は固より印度までも征服せんとし

の下に何れの上陸も皆成功した。

鎭海附近に上陸した部隊は敵の同地守備隊を擊破して前進、寧波、餘姚を占領した。寧波は人口四十萬內外、

浙江財閥の中心根據地で、我國とは早くから貿易してゐた。浙江省第一の海外輸送路である。秀吉が東亞征服の大作戰を樹てた時、此の寧波に大本營を設けて呂宋、馬來、瓜哇、安南、暹羅は固より印度までも征服せんとしたもので、それだけ寧波は其の當時戰略的形勝の位地を占めたものである。



東海岸封鎖

海門附近に上陸した部隊は、水路を利用して其の西南の黃巖、及び西方の臺州を攻略し、又瑞安に上陸した部隊は直ちに進んで十九日夕溫州を占領した。溫州は此の附近の要港で溫州密柑の產地として知られる。

福州方面は稍々敵の抵抗あつたが、飛行機協力の下に先づ閩江南北の沿岸に奇襲上陸しそれより福州城に突入占領した。福州は福建省の都、人口約四十萬、華僑の根據地、事變前邦人が約二千名もゐた所である。

以上の如く各要地に上陸して輸送路を遮斷すると共に該地にある無數の物資を押收した。

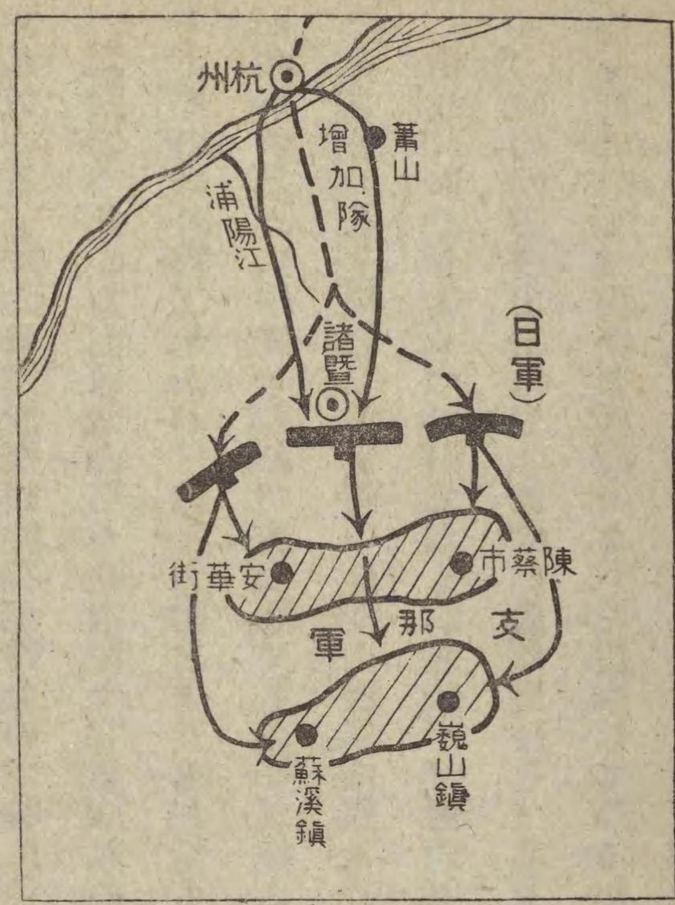
【諸暨南方作戰敵】 敵第三戰區司令官顧祝同は浙江沿岸の重要輸送路を失ひ且つ陸地の要鎭諸暨をも占領せら

れたるを憤り、先づ諸暨を奪還せんと、麾下第十集團軍約十萬を其の東南方に集結し風雲急なるものがあつた。之に對し我が統帥部に於ては實に卓勵風發、兵力の大轉用を斷行したことは戰史に特記すべき痛快事である。即ち東海岸の臺州、溫州にある部隊を撤し、之を海路上海に輸送し、それを鐵道にて杭州に運び、それから陸路諸暨の戰場に出さうと云ふのである。一は大膽であり一は賭博でもある。臺州から諸暨までは陸路百二十吉米に過ぎない。それを船に乘せ、海路四百吉米、それから上海から杭州まで汽車二百吉米、杭州から又約百吉米を經て諸暨に達するのであれば彼れ是れ約七百吉米の大迂回である。僅か直距離百二十吉米の捷路を取らずに七百吉米の迂路を取つた所に戰略の妙があり、それが又敵の虛を擊つと云ふものである。臺州から諸暨までの間は山地であり、敵は豫め日本軍の來るべきを期して相當の配備をなしてゐるに相違ない。故に其の方面に進み山間に踏み込むよりは七百吉米の迂路を取つた方が結局早道であり、且つ却つて敵の意表を突く所の戰略でもある。このやうな作戰は仲々一寸出來ない放れ業だ。

敵將顧祝同は麾下の集團軍五個師の第一線を諸暨の東南陳蔡市、安華街の線に、第二線を巍山鎭、蘇溪鎭の線に置き反擊を企圖してゐた。

以前より此の方面にあり敵と對峙してゐた我が兵團は前述の如く海岸より迂回し來たる增加部隊と遙かに連絡の上、五月九日頃攻擊を開始し、敵に日本軍兵力の少きを見せかけて巧に敵を操り、同十二日增加部隊の來著と共に猛烈なる包圍攻擊を開始した。時恰も連日の豪雨にて行動頗る困難であつたが、我が將兵は奮勇猛進、包圍圈を縮め遂には敵を巍山鎭北方山地內に窘迫して殆んど之を殲滅に歸せしめた。敵の遺棄した屍體

の上、五月九日頃攻撃を開始し、敵に日本軍兵力の少きを見せかけて巧に敵を操り、同十二日增加部隊の來著と共に猛烈なる包圍攻撃を開始した。時恰も連日の豪雨にて行動頗る困難であつたが、我が將兵は奮勇猛進、包圍



諸暨附近の戰
(五月)

圈を縮め遂には敵を巍山鎭北方山地內に窘迫して殆んど之を殲滅に歸せしめた。敵の遺棄した屍體約一萬餘に達した。之により顧祝同の計畫せる「五月攻勢」なるものが不可能なるに至つた。

浙江省の面積は約十萬平方吉米、人口二千萬、福建省は面積約十五萬平方吉米、人口一千百萬である。獨伊と戰つて敗れた希臘全國の面積は大抵浙江省と似寄つてゐるが、其の人口は僅かに七百萬で、此の點遙かに少い。是等のことから歐洲戰に比較して支那事變が如何に大きいかが察しられるであらう。

第三節　中原作戰（五月—六月）

二月（香韶ルート遮斷作戰）、三月（雷州及び汕尾作戰）、四月（福州作戰）と引續き中支、南支の沿岸に奇襲上陸作戰を敢行し重慶に對する密輸入路の徹底的破摧作戰を行ひつゝあつた我軍は五月に入り支那南北各地に活潑なる作戰を行ひ敵の心膽を寒からしめた。五月半ば支那大陸は既に夏の時候にして、日中は炎熱燒くが如く、

夜は寒冷を覺え、加ふるに大陸特有の黃塵萬丈の時期である。

【作戰地方面の地形】　中原作戰の展開された山西省南部及び河南省北部方面の地形を概觀するに、山西方面は中條山脈、標高千米以上の大山岳地帶であつて、大地隙到る處に横たはり、道路は發達せず、多くは河床を道路として使用してゐる有樣で從つて人馬の交通極めて不便であり、我が師團長以下皆徒步進擊を行つてゐる。河川は谷間を縫ひ減水期には殆んど水量がなく、一度雨を見ると忽ち激流となつて荒れ狂ふ。河南方面卽ち懷慶（泌陽）東方地區は平野にして交通網も可なり發達してゐるが、此の地方は旣に幾回となく戰禍に見舞はれ極度に疲弊してゐる。加ふるに惡疫の流行地帶なので特に注意を要する。

【敵情】　此の方面は敵の第一戰區司令官衞立煌の守備擔當區域で、彼は麾下の第五集團軍、第十四集團軍、第九軍等の總計約二十個師、總兵力約二十五萬と見られてゐる。此の軍は事變開始以來、山西南部の戰に於て幾度か我軍の爲めに擊破せられ、或は黃河を渡つて南に走り、或は散亂して山間に潛匿し、而して日本軍の他に轉ずるを見るや又々出現して黃河の北、山西省に進入して來るのである。

何故に斯くも懲りずに出て來るかと云へば山西省殊に黃河の北岸は戰略上の進出據點として重要な地點であり、又山西省は山岳地であれば此處に潛匿して北支を攪亂するに屈强な策源地ともなし得るため、蔣介石は「黃河を死守せよ、山西を奪還せよ」と嚴命してゐるからである。

それで今度衞立煌は勇敢にも約二十萬を以て黃河を渡り同河を背後に標高一千米以上の山地帶に、概して半圓形に堅固なる防禦陣地を占領した。所謂背水の陣である。昔韓信は矢張り同じ山西省のもつと北の井徑附近の戰に背水の陣を取つて勝利を得、史上に其の名を傳へたが、衞立煌は果してどうか。彼の陣地の延長は右は孟縣か

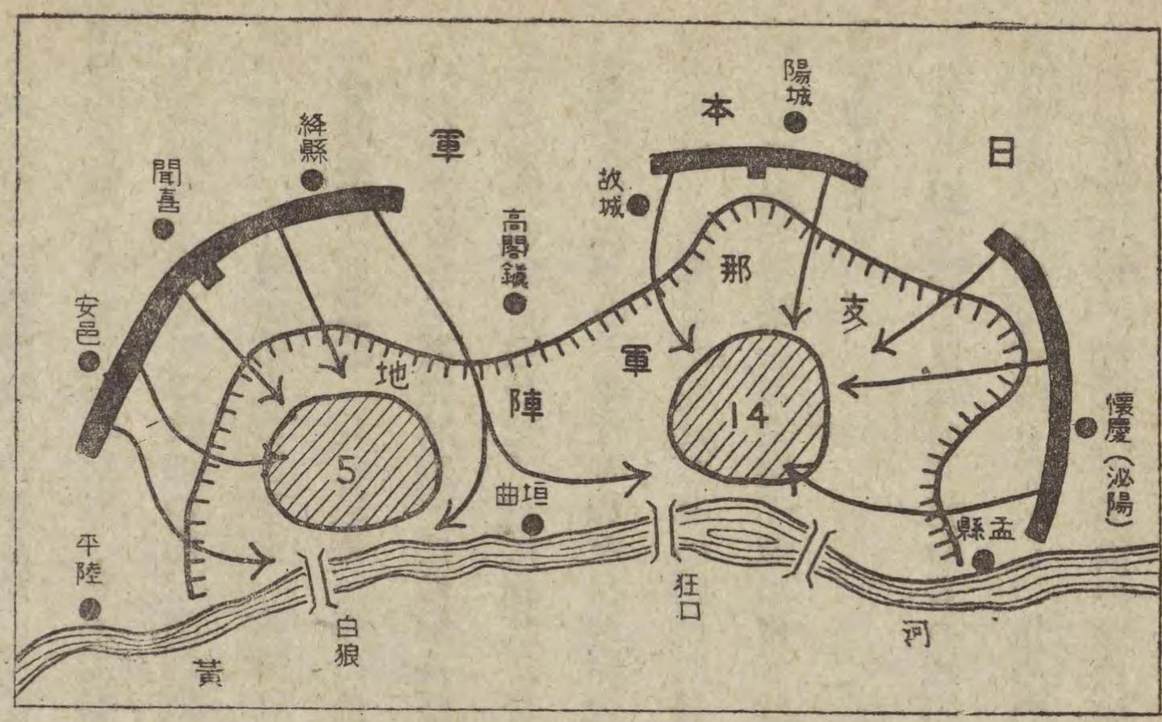
河を死守せよ、山西を奪還せよ」と嚴命してゐるからである。

それで今度衞立煌は勇敢にも約二十萬を以て黃河を渡り同河を背後に標高一千米以上の山地帶に、概して半圓形に堅固なる防禦陣地を占領した。所謂背水の陣である。昔韓信は矢張り同じ山西省のもつと北の井徑附近の戰に背水の陣を取つて勝利を得、史上に其の名を傳へたが、衞立煌は果してどうか。彼の陣地の延長は右は孟縣から懷慶の東北方を經て故城の南、高閣鎭を過ぎて平陸の東に亙り蜿蜒二百五十吉米、即ち約六十里の長さに及び、而して左翼に第五集團軍を、右翼に第十四集團軍を配置した。

【戰鬪經過の概況】 此の敵を一擧に捕捉殲滅すべく我が北支軍は五月七日、日沒より一齊に攻擊の火蓋を切つた。最高指揮官（多田將軍）は參加全將兵に對し「矢は弦を放れた、敵は小敵なれど油斷は大敵なり、奮鬪を祈る」と激勵の辭を送つた。正に北支に於ては徐州戰以來の大作戰である。

其の攻擊部署の大要は有力なる右翼大兵團を安邑、聞喜、絳縣の線に展開し、一兵團を中央の陽城附近に、他の有力なる兵團を懷慶及び其の附近に展開し東、北、西の三方面から包圍隊勢を取り疾風迅雷的の强襲を以て幾線にも堅固に構築せる縱深陣地に據る敵の頑强なる抵抗を排除し、翌八日明方迄には其の主抵抗線を突破して猛進を續けた。

右翼方面に於ては其の一部のものは同日夕には早や垣曲、白狼附近の敵の主要渡河點に殺到して退路を遮斷し、九日朝迄に外側包圍圈を完成し、他の部隊は同日夕刻頃迄に內側の包圍を完成して敵左翼の第五集團軍を二重に包圍して了つた。故に此の方面の敵は退路を遮斷されて指揮全く錯亂し、我が包圍圈中を右往左往してゐる有樣である。



中原作戰
（五月——六月）

一方我が左翼方面の戰鬪の進捗如何と見るに、此の正面にある敵の第十四集團軍は頑强に抵抗したが懷慶方面から突進した我軍と、垣曲方面から進んで來た我軍との爲め背後を遮斷され、是れ亦袋の鼠となつた。之と同時に懷慶北方並に陽城方面より突進せる我軍の攻擊は益々猛烈を極めたので敵は決死の抵抗をなすと云ふ有樣である。

斯くする內我が外側包圍軍は今度は內面に向ひ攻擊を開始したので、敵は前後左右から挾擊されると云ふ狀況となり全く潰亂狀態に陷り最早集團の形體を見ざるに至つた。

衞立煌は我軍の黃河渡河南進を恐れ、遽かに豫南地區から、此の前の敗將湯恩伯軍の北上を促したが、時已に遲く、二十萬の敵は四分五裂し或は山中深く遁入潛伏し、或は降伏して文字通り殲滅に歸したのである。

此の戰は五月七日夕刻より起り旬日にして敵を黃河河畔に包圍殲滅し、二十一日より第二期作戰に入り殘敵の掃蕩に從事し大凡六月中旬を以て戰局を終つた。よつて我軍は河岸に堅固なる築城を施して嚴重なる封鎖を實施し、新占據地に駐兵した。斯くて蔣介石の總反抗の一大據點華北策動の根源を完全に覆滅し蔣陣營に震撼的打擊を加へ

事し大凡六月中旬を以て戰局を終つた。よつて我軍は河岸に堅固なる築城を施して嚴重なる封鎖を實施し、新占據地に駐兵した。斯くて蔣介石の總反抗の一大據點華北策動の根源を完全に覆滅し蔣陣營に震撼的打擊を加へた。

此の戰に於ける敵の兵力は約二十五萬で其の遺棄屍體約五萬、捕虜三萬一千、火砲百七十七門、重輕機六百五十七挺、小銃約一萬挺であつた。

我軍の獲た此の赫々たる勝利は作戰計畫の周密適切であつたことゝ、志氣の極めて旺盛であつたことは勿論であるが、此の戰に於ては特に後方輜重を携行せず、行動を鈍重ならしめる飯盒炊事のやうなことを排し、携帶口糧二日分を以て戰つたと云ふのである。既に此の決心と此の準備、果して二日を以て大體の勝負をつけたのであつた。

第四節　第一次長沙作戰（九月—十一月）

敵軍は此の六月頃に大體新軍の整訓を終つたが全般の動きとしては相變らず消極守勢的で、何等積極的に出る模樣がない。

しかし蔣介石は「最近に於ける國際情勢の急迫化に伴ひ、日本軍は近い將來南方に或は北方に新らしい作戰を企圖するため在支兵力を引き抽いて使ふであらう」といふ具合に情況を判斷し、日本の動きに對して非常に注意

此の戰は五月七日夕刻より起り旬日にして敵を黃河河畔に包圍殲滅し、二十一日より第二期作戰に入り殘敵の掃蕩に從

を拂ひ、威力偵察らしいことをやつて見たり、或は遊擊戰、謀略戰に努め、日本軍は近頃非常に弱つたとか、將兵の戰意低下したとか實に得手勝手な宣傳を行つた。つまり之により英、米、蘇聯諸國を刺戟して支那事變に引き摺り込み、他力で事變を解決しようとの野望でもあり、又一面、最近の經濟切迫から軍隊內に厭戰氣分が漲つてゐる爲めに、之を掩はんとする一つの手段でもあるのである。此の時に當り我軍は天高く馬肥えるの候、岳州南方に第一次長沙作戰を開始し重慶を震駭させたのである。

【戰鬪經過の概要】　中支方面は比較的敵の行動活潑であり、岳州南方長沙方面に在る敵第九戰區は薛岳麾下の兵力約四十萬で、之には中央直系の諸軍も入つて居り、且つ武漢の南方近く蟠踞してゐるので之を擊滅粉碎せんと此の作戰が企てられたのである。一昨昭和十四年にも一大鐵槌を加へたことあるが、其の後又々蝟集して以上のやうな大兵力となつてゐたのである。

我軍は九月七日より十一日頃まで、先づ一部を以て岳州東方大雲山附近にある敵の前哨陣地（敵の精銳第四軍）を擊滅すると共に主力を以て岳州南側附近に集中した。

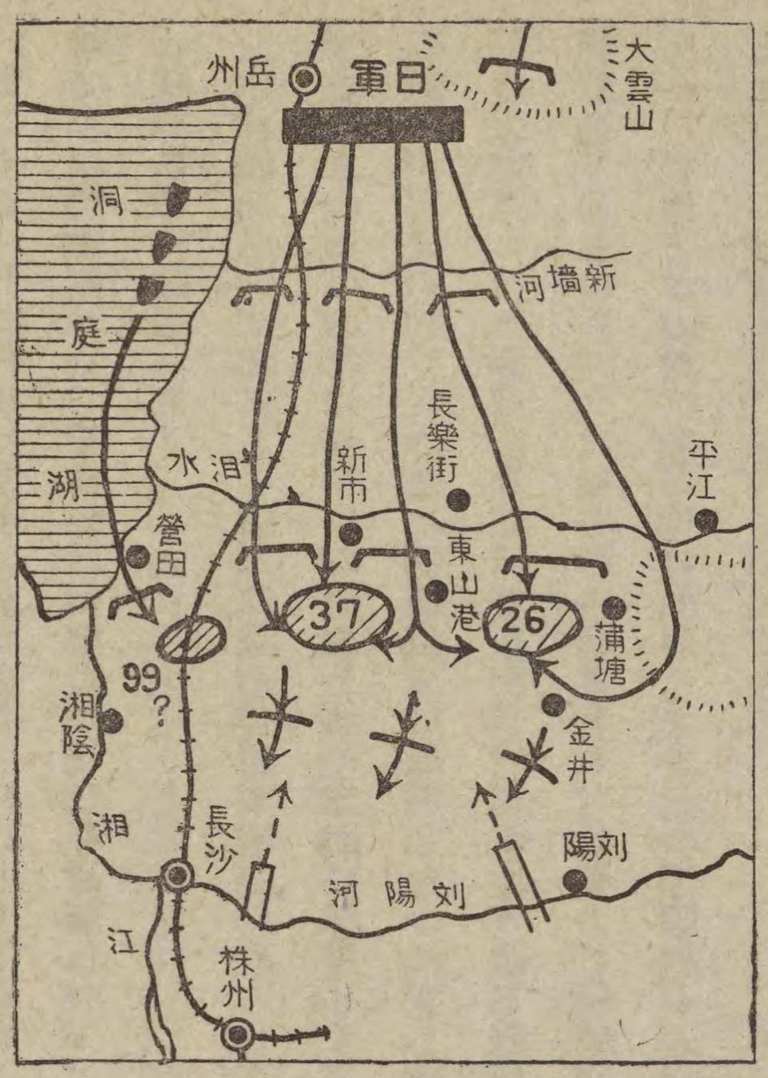
次いで九月十八日天明と共に、海軍協力の下に一齊に岳州南方の線を出發し新墻河々畔の敵陣地を突破し、一氣に汨水右岸の地區に進出した。

當面の敵は第九十九軍、第三十七軍、第二十六軍等の敵主力であつて栗山港を中心として汨水の左岸に陣地を占領してゐた。二十一日我軍は長樂街、新市附近より汨水を渡河攻擊して河畔の敵陣地を突破した。此の時敵第二十六軍は我軍の左側背を包圍する態勢を執らうとした。

我軍などで之を許すべき、我が左翼兵團は直ちに蒲塘東方山岳地帶を突破迂回して敵の後方金井附近に現はれ

當面の敵は第九十九軍、第三十七軍、第二十六軍等の敵主力であつて栗山港を中心として汨水の左岸に陣地を占領してゐた。二十一日我軍は長樂街、新市附近より汨水を渡河攻撃して河畔の敵陣地を突破した。此の時敵第二十六軍は我軍の左側背を包圍する態勢を執らうとした。

我軍などで之を許すべき、我が左翼兵團は直ちに蒲塘東方山岳地帶を突破迂回して敵の後方金井附近に現はれ逆に敵の側背を包圍攻撃した。此の一撃に敵は虚を衝かれて動揺を始め、遂に敵第二十六、第三十七軍は各所に捕捉潰滅され、第九十九軍は側方に退避した。



第一次長沙作戰
（九月一十一月）

我軍は勝に乘じ猛追撃に移つた。敵は汨水河畔より長沙までに概ね四線の防禦陣地を構築してゐたが我軍の急追に會ひ、之に踏み留まるの餘裕もなかつた。從つて南方より急行來援の敵第十軍、第七十四軍も空しく其の捲添を喰ひ躊躇してゐる所を我軍に横擊され殆んど殲滅された。よつて我軍は長驅突進、二十七日長沙に進入し二十九日には其の後方の要點株州を占領し、茲に第九戰區主力及び增援軍計約三十個師を擊破し其の内の中央系十二個師に殲滅的打擊を與へ豫期以上の成果を收めた。

此の作戰間海軍部隊は洞庭湖方面より湘江沿岸に行動して敵を牽制し、又東方南昌方面にある我が友軍は其の方面にある第九戰區の敵を攻擊して策應した。

此の如く今回の作戰は當初の計畫より十日以上も早く成果を收めることが出來たので、十月一日概ね瀏陽河の線より反轉を開始し、鐵道線兩側地區の殘敵を掃蕩しつゝ、湘江右岸の敵據點湘陰を覆滅し七日概ね新墻河以北占據地區內に歸還した。

本作戰間敵の江北にある諸軍は我が作戰牽制のため九月末頃より全面的に反攻し來り殊に宜昌周邊の敵は執拗であつたので、我軍は反轉中の兵力を其の方面に轉用して之を擊退掃蕩した。

我軍が以上の如く長沙を占領後直ちに撤退したのに對し敵及び英米系の通信は得たり賢しとばかり、日本軍が長沙で大敗したと馬鹿氣な宣傳をした。我軍が屢々敵を擊滅して原駐地に歸還するのは、既に樞要な地點は充分獲得してゐるので、今は地點の占領よりも、敵戰力を擊滅するを目的として作戰してゐるのである。それを敵は巧みに利用するのだ。此の作戰間珍しくも敵の爆擊機十一機が我軍に襲來したが、其の一機は宜昌附近に著陸して堂々と我軍に投降歸順を申出でた。

斯くの如くして本作戰の全く終了したのは十一月六日である。此の戰に參加せる敵兵力は約五十萬（主作戰方面約三十七萬、其他約十三萬）にして戰場に遺棄した屍體約八萬二千、捕虜八千三百、砲百五門、小銃約一萬三千挺等で、我軍の尊い戰死者は約五百名であつた。

第五節　第二次長沙作戰（十二月—一月）

此の作戰は前節第一次長沙作戰と同一戰場で同じやうな行動となつたのである。

面約三十七萬、其他約十三萬）にして戰場に遺棄した屍體約八萬二千、捕虜八千三百、砲百五門、小銃約一萬三千挺等で、我軍の尊い戰死者は約五百名であつた。

第五節　第二次長沙作戰（十二月—一月）

此の作戰は前節第一次長沙作戰と同一戰場で同じやうな行動を取つたのであるが、其の目的は少しく異るものがある、以下之を述べる。

十二月八日帝國は米英に對し開戰を布告し在支軍の一部を以て香港攻略戰を開始した。此の時重慶政權は米英に策應せんと全面的にゲリラ戰を促進すると共に、數個軍を緬甸（ビルマ）國境に推進し且つ日本の香港攻略戰を牽制せんとして廣東以北に在る餘漢謀の第七戰區の兵力を集中したり、長沙附近に在る薛岳の第九戰區からも二個軍を抽出轉用したりした。之に對し我が南支日本軍は極力是等の支那軍を牽制するか、擊滅するかして香港攻略を援助せねばならぬので其の責や大である。香港攻略の成否は、大東亞戰爭の性質上からして今までの支那軍に對する成敗に比して事の重大なるや云ふまでもなし。茲に於てか我が在支最高統帥部に於ては深く考慮する所ありて此の第二長沙作戰を起し當面の敵を牽制若くは擊滅して一は廣東方面にある南支友軍を援け、一は遙かに香港攻略軍の作動に貢獻せんとしたのは當時の狀況に於て固よりのことである。

我が進攻軍は岳州附近に攻勢を準備し、十二月二十四日夕新墻河の線より攻擊を開始し夜半までに南岸陣地を突破して當面の敵を擊破し、增水せる汨水を渡河して一氣に前岸にある敵數線陣地を突破し更に今次作戰の效果を最大ならしむるため三十日長沙に向ひ猛追擊を開始した。

此の附近の戰場は一、二箇月前馳驅したる熟地であれば行動も快調を以て進み一月一日の元旦、一兵團を以てする攻擊を長沙に試み、其の一部は夕刻城の東南角に突入したが、守兵は豫想に反し敵精鋭第一軍の全力にして頑强なる抵抗を繼續し仲々侮るべからざるにより、更に有力なる後方兵團を增加して北、東、南より包圍し、航空隊の協力と相俟つて敵を猛擊した。

此の時敵の一軍は對岸より督軍するので長沙の守兵は狂勇を揮ひて死守し、尙ほ他の戰區より續々有力な敵援軍が到著し四方より我を包圍せんとするの隊勢にあつた。よつて我軍は奮勇强攻、長沙を略して市內の掃蕩を終り多くの敵を牽制して其の目的を達したるを以て、一月四日例の如く長沙を撤して反轉を開始し敵の妨害を排除して瀏陽河を渡河北進し、我れを邀擊せんと待伏しある敵第二十、第三十七、第五十八、第七十三、第九十九軍を蹂躪粉碎して四散せしめ、或は執拗にも追蹤蝟集し來る敵第四、第二十六、第七十八軍を反擊して隨所に擊破し悠々として原駐地への歸還を續けた。

此の際我軍は多數の患者及び輜重を携行護送し且つ彈藥等の補充意の如くならず相當困難なる狀況であつたに拘はらず、屢々反轉して敵に甚大なる損害を與へ遂に敵をして追擊を斷念せしめ一月十五日概ね新墻河以北の地に歸著した。

此の作戰は往復約八十里の戰場を馳驅し殆んど約十倍の敵と反復難戰苦鬪を交へたが、克く其の敵を擊破して作戰本來の目的を達したるは偉とすべきである。

此の戰に參加したる敵兵力は約二十五萬にして、其の戰場に遺棄した屍體は約五萬八千、捕虜約二千、火砲七十五門、小銃約六千挺の多きに達した。

に歸著した。

此の作戰は往復約八十里の戰場を馳驅し殆んど約十倍の敵と反復難戰苦鬪を交へたが、克く其の敵を擊破して作戰本來の目的を達したるは偉とすべきである。

此の戰に參加したる敵兵力は約二十五萬にして、其の戰場に遺棄した屍體は約五萬八千、捕虜約二千、火砲七十五門、小銃約六千挺の多きに達した。

第六節　評　論

本年即ち昭和十六年は政治、外交、軍事共に慌たゞしい年であつて、それが直接に支那事變に影響したが、其の影響は好調の重來とも云ふべきものであつた。即ち蔣軍の行動は何れかと云へば消極的であり、佛印には我軍が進駐增兵し、汪政權は月と共に堅實となり、四月には日蘇中立條約が成立し、六月には獨蘇の開戰、八月には重慶爆擊の强行、十月には東條內閣が成立して「支那事變を完遂し大東亞共榮圈を確立して世界平和に寄與するは帝國不動の國是なり」と聲明し、十二月八日には米英に對する宣戰の大詔を拜して大東亞戰爭の段階に入つたのである。是等內外の事件は何れも皆支那事變の戰場に戈を橫たへてゐる將兵の士氣を刺戟鼓舞する活劑となつたものである。

本年は前年同樣、北支、中支、南支を通じ數十回の作戰を反覆遂行して多大の成果を收めたが、地廣く人多き支那奧地に屛據せる蔣介石は尙ほ未だ屈せずして二百萬以上の兵を擁し、英米に依存して僥倖による最後の勝利を夢みてゐるやうである。されど事變以來、一年は一年と其の抗戰力は低下し經濟力は逼迫し殊に我軍の封鎖により外來物資の輸入は杜絕し、佛印を通ずる援蔣路、支那沿岸による密輸入路は凡て我軍により抑へられ、今は

唯ビルマルートの一あるのみである。北方の援蔣路は獨蘇開戰の今日では到底望まれべくもない。此の如く彼は唯ビルマルート一本の命の綱に賴る哀れな一軍權であるが、尙ほ幽かな生命を繫いでゐることの出來るのは一に支那大陸の自然が廣大であるお蔭である。それにしても彼は年を逐ひ、日を廻つて細まり行くべきは是れ亦自然の運命と見ねばならぬ。

之に反し我軍は萬里天涯の異域に百萬の大軍を懸け四年有半朝戰夕鬪撓まざるのみならず、士氣は益々昂り戰力愈々加はるのみならず、所謂一面戰鬪、一面建設の成果を擧げつゝ、更に大東亞戰爭の舞臺に飛躍した颯爽たる意氣に至りては全世界の驚異たるのみならず、我が一億國民でさへ今更の如く深く感激感謝に打たるゝ所である。卽ち四年有半戰ひつゝ一合目、二合目と富士の絕頂に向ひ六根淸淨の健脚を進めたのである。蔣軍は朝顏の如く漸く萎み、日軍は朝日の如く愈々輝き、正に反對の運勢を示してゐる。之が昭和十六年末頃に於ける彼我の情勢觀である。

本年我軍の行つた三十有餘の作戰には戰略上皆夫々の特色を持つてゐるが、殊に本文に揭載した五個の大作戰は其の計畫指導皆範とすべき傑作である。今其の大要を摘記せんに。第一の豫南作戰に於ては先づ敵の後方遙かに大きな網を張り、敵來らば殲滅し吳れんとの隊勢を示して敵に大なる不安の念を與へ、而して前面から三縱隊を以て敵の兩翼を包圍する如く計畫したあたりは、戰はずして旣に敵の心陣を擊碎したものである。故に戰鬪の經過は快調を以て好果を奏した。

第二の浙東作戰の特色は兵力の大轉用である。昔は全體の兵力が少く從つて戰線は局限されて狹いから、右方の兵力を左方に轉用するやうなことは殆んど行はれなかつた。然るに現代戰の如く兵力も多く、戰線も廣くなる

に大きな網を張り、敵來らば殲滅し呉れんとの隊勢を示して敵に大なる不安の念を與へ、而して前面から三縱隊を以て敵の兩翼を包圍する如く計畫したあたりは、戰はずして既に敵の心陣を擊碎したものである。故に戰鬪の經過は快調を以て好果を奏した。

第二の浙東作戰の特色は兵力の大轉用である。昔は全體の兵力が少く從つて戰線は局限されて狹いから、右方の兵力を左方に轉用するやうなことは殆んど行はれなかつた。然るに現代戰の如く兵力も多く、戰線も廣くなるに從ひ、兵力の轉用も屢々應用せられるやうになつた。此の前の世界大戰にはそれが頗る多かつた。日露戰爭の時でさへ、日本軍は往々此の轉用作戰を用ひて兵力の寡少を補つたもので、兵力轉用は或は日本が其の元祖かも知れない。然るに此の浙東作戰に於ける日本軍の轉用は實に大規模なもので、小膽者では到底出來ない位の冒險事業であつた。しかも其れが理想的に出來て偉大な戰果を擧げ得たのである。

第三の中原作戰は二重包圍の範例として見るべきである。第四の第一次長沙作戰は迂回によつて成形した包圍が原動力となつて敵を動搖せしめた好範例であり、第五の第二次長沙作戰は全般の形勢上、神速を要する關係からして、餘りに技巧を用ひず、正面攻擊に重きを措いたやうな點が特に研究の價値がある。しかして長沙に打ち當つて案外頑强な敵に衝突するや、逡巡躊躇することなく直ちに後方の兵力を增加して之を擊破したる如き、敵を侮ることなく正面攻擊の戰法を應用した點を特に見るべきである。此の如き場合には、往々敵を輕視し、現兵力を以て遮二無二强攻を反復するのが人情の常で凡將は往々此の小感情に捉はれて無益の損傷を多くし且つ戰機を誤ることがある。然るに我軍は「是れ、いかん」と判斷するや直ちに所要の兵力を注ぎ込んで勝を制したのである。兵書にも「必要に充たざる兵力を以て攻擊を續行するは自滅を招くの基なり云々」の戒めがある。

以上のやうに考察すると、縱令敵は兵略の才に乏しく、其の戰法がゲリラ式であり、兵士の訓練亦未熟である

にせよ、我れに於ては常に正々の構を執つて戰ふべきである。日本軍は其の對手の甲乙を問はず、其の場合の如何を論ぜず常に此の正法を執つた。是れ敗れざる所以である。横綱や碁、將棋の名人は其の對手の如何に拘はらず常に不敗の姿勢を以て敵に臨み、正式の手法を以て戰を行ふものだ。日本軍亦然りであつて、事變以來幾百千回の戰に於て、支那軍を侮り、與みし易しと見縊つて戰を終始したことがない。是れ連戰連勝する所以である。我れ連戰連勝するにあらずして、神が勝たして呉れるのである。斯く觀ずる所に誠心を以て戰を終始する日本軍を見出し得るのである。

第九章　興亡評論

一本の燐寸の火が世界を焦がす劫火となると同じく、蘆溝橋々畔の一發が支那事變となり、それが大東亞戰爭と發展し、マレー、フイリッピン、蘭印、ビルマと擴大し其の進勢の滔々として止まる所を知らざる有樣である。此の戰を起したのは日支兩國であるが、之を起さしめたのは米英である。今や其の米英は自分の蒔いた毒草に顏面皮膚を糜爛せしめて苦悶に呻吟してゐる。

支那事變たるや交戰四年半、終れるにあらず、幕は大東亞戰爭に續くのであるが、今茲には此の四年半の間に於ける戰を鳥瞰的に評論して見ようと云ふのである。

【作戰の主眼】 戰は速戰卽決を主とすることは云ふ迄もない。日支兩國共にそれを主眼として作戰計畫を立てたに相違あるまい。然るに事實は仲々思ふやうに行かず、約五年の年月を要したのであれば其の初めの計畫を今茲に是非評論するよりは其の結果から見てそれを省察研究する所に却つて價値が多からうと思ふ。作戰指導の結果は、

事變最初の二年は大體に於て攻略作戰

爾後の三年は大體に於て建設作戰

以上の如くであつて、卽ち事變勃發の昭和十二年にありては北支の北京、天津附近の膺懲戰を始め、察哈爾

省、綏遠省を攻略し、大同、太原を陷れて山西省を收め、河北省の南部、山東省の北部を掃蕩し、中支に於ては上海附近の堅陣を突破して首都南京を陷れた。

越えて昭和十三年の春五月に於ては徐州會戰に敵の精鋭を粉碎し秋十月に於ては廣東を攻略し、次いで武漢三鎭を陷れて敵を重慶に窘縮せしめた。此のやうに此の二年に於て北京、天津、太原、濟南、上海、南京、徐州、武漢、廣東と云ふ支那の主要都鎭並に其の廣大なる地域を占據して大體蔣軍の戰鬪力を打倒した譯である。つまり突進々々、攻略々々の連續行であつたのだ。日本軍の進攻と同じく敵も亦攻擊意圖を緊張せしめて戰つたのであるが、彼は敗れた。

それで彼は翌昭和十四年には武力の再編成を終り攻勢と云ふ前觸れ勇ましく春季攻勢、夏季攻勢、九月攻勢、冬季攻勢と數回に亙つて反擊を行つたが、何れも皆我軍の爲め擊滅され、蔣介石直系軍が最も手痛き打擊を受けた。之に懲りたものか爾來蔣介石は其の戰略を變更して奥地に退避し此處を根據として持久戰を策し例のゲリラ戰を用ひて日本軍の戰力を損耗せしめると云ふ所謂消耗戰法を採つたのである。それで日本軍は、地域の占據範圍を大抵從來の通りとし爾後本格的に封鎖作戰、建設工作の段階に入つたのである。即ち封鎖によつて蔣介石を窮迫せしめ、建設工作を占據區域内に施して肅清歸服を圖つたのである。

日本軍が進攻を續けて蔣介石軍閥を擊滅せんと欲せば極めて容易に出來るのであるが、其の後之を敢てなさざりし所以のものは支那事變は本質的に敵を擊滅せずんば已まぬと云ふものではないからである。抑も此の戰は元と〳〵東亞の兄弟喧嘩であれば憎みて殺すと云ふのではない。十二月八日の宣戰詔書の中にも御示しの通り我と彼とは兄弟なのである、他人の誘惑により邪道に引き入れられた可愛い弟に愛の鞭を加へ涙の折檻をしたのが、今度の暴支膺懲である。何時かは迷夢より醒めて兄の許に歸るであらうと、それを待つてゐた。進攻して致命せ

日本軍が進攻を續けて蔣介石軍閥を擊滅せんと欲せば極めて容易に出來るのであるが、其の後之を敢てなざりし所以のものは支那事變は本質的に敵を擊滅せずんば已まぬと云ふものではないからである。抑も此の戰は元と〳〵東亞の兄弟喧嘩であれば憎みて殺すと云ふのではない。十二月八日の宣戰詔書の中にも御示しの通り我と彼とは兄弟なのである、他人の誘惑により邪道に引き入れられた可愛い弟に愛の鞭を加へ涙の折檻をしたのが、今度の暴支膺懲である。何時かは迷夢より醒めて兄の許に歸るであらうと、それを待つてゐた。進攻して致命せしめ得る手を緩めて待つてゐたのである。從つて彼に對して宣戰布告もない。日本の希望する所は支那の滅亡でなく支那の興隆である。支那の征服にあらずして支那との協力である。

其處に根本方針を持つてゐた日本であれば、適宜の所で攻略の手を收めて封鎖作戰、建設工作に力を致し、此の間に蔣政權の黑幕たる米英打倒に關する準備を整へたのである。即ち戰ひつゝ建設し、消耗しつゝ增殖し以て大東亞戰爭の新舞臺に現はれたのである。此の日本の執つた方策は正に普通に云ふ戰略を飛び越えた大乘戰略とも云ふべきもので古今の戰史に其の例を見ざる所である。

俗に削れば削る程小さくなるのは鰹節で、削れば削る程大きくなるのは井戸穴だと云ふことがある。戰爭は長びく程軍力が疲勞して行くのが普通であるが、今度の日本軍は年と共に其の力が增殖して行くと云ふに至りては計畫指導した統帥本部の卓越せる大手腕と云はざるを得ぬ。

【一般戰略】 日本軍の試みた大戰略は第一年に於ては北支を收めて根據を固め、遙か南方の上海、南京に强く一本の楔を打ち込み敵を困迷に陷れて左顧右眄せしめ、第二年目（昭和十三年）には此の南北の二軍が相進みて敵を徐州に挾擊粉碎し、南北連絡して一大勢力となり、之を以て武漢三鎭を陷れた。此の時にも遙か南方の廣東

に一本の楔を打ち込んで敵を震駭せしめた。

第三年目（昭和十四年）には又其の南方の海南島を奇襲攻略し且つ南寧に強い釘一本を打ち込んで敵を戰慄せしめた。第四年目（昭和十五年）には尙ほ其の南方しかも支那の領土でない佛印に進駐して敵をアツと言はせた。第五年目（昭和十六年）には尙ほまた其の南方のマレー、泰、ビルマ等への大進擊となつて敵にビルマ・ルート遮斷と云ふ痛棒を喰はしたのである。

以上日本軍の作戰は、それが事前の計畫にせよ、狀況の變化による自然の發展にせよ、何れにしても實に天衣無縫とも云ふべき程の合理的、有效的なものであつた。一とたびは上海に次は廣東に、海南島に、佛印に、ビルマにと遞次に痛棒を敵の後へ〳〵と打ち込んで行つたあたりは、禪僧が凡夫を悟らしめんがため、連りと喝棒を喰らはすやうなものであつた。しかも蔣介石は尙ほ未だ悟るに至らなかつた。

日本の陸海空軍は共に天下無敵であるが、前述の南方への遞進作戰は海軍に負ふ所が多い、海軍は海を制し空軍は空を制し陸軍は陸を制した。此の立體的三制の力を獲た日本軍にして連戰連勝したるは固より當然である。

しからば敵たる支那軍は、弱兵であるかと云へば決して然らず。彼等は英、米、蘭印兵よりも強いとは一般の評である。將校の戰術上の能力亦強ち低劣と云ふのではない。開戰當初、北支方面に於ける彼等の作戰の如きは大軍統帥の法に合したものである。唯各單位團結協同の精神並に訓練に於て缺くる所あるがため、未だ充分其の實力を發揮し得ずして敗れたやうである。彼等は敎導其の宜しきを得ば精强な軍兵となり得るの民族的特性を持つてゐるのである。

【兵力】 日本軍の兵力總數は不明である。戰の進むに從ひ當然兵力の增大を要するものであるが、日本軍のそ

つてゐるのである。

【兵力】 日本軍の兵力總數は不明である。戰の進むに從ひ當然兵力の增大を要するものであるが、日本軍のそれが多々益々辨ずると云ふ風で、北支、中支、南支は勿論、大東亞戰爭の廣大な戰線に亙り所要の兵員を充たし且つ滿洲に盤石の備へがあつて餘裕綽々たるものがある。卽ち底知れぬ人的資源の豐富なるを思はしめてゐる。

蔣介石始め米英あたりは日本を見縊り、日本は緒戰には勝つかも知れぬが一年か一年半にして其の國力は消耗し從つて軍の作動も長くは續くまい。故に其の時を待つて日本に止めを刺さうと云ふのが彼等の豫定であつた。然るに年一年と日本軍の强くなり且つ多くなるには彼等も驚いたのである。これは前にも述べた如く、日本軍は消耗しつゝ建設しつゝあつたからである。

それよりも不思議なのは支那軍の兵力である。連戰連敗、開戰以來戰場に遺棄した屍體のみでさへ二百何十萬と云ふ大數であるのに五年目の今日蔣介石は尙ほ三百萬の大軍を持つてゐると云ふ奇蹟である。第一戰區から第九戰區に亙り兵力を配置し尙ほ旗本軍を重慶附近に持つてゐる。しかも蔣介石の是等の軍に對する統率力は今尙ほ相當鞏固なものがあり、其の命令も大體に於て實行されてゐるやうな現狀である。

三百萬の兵力を保持するには相當の軍費を要する譯であるが、支那は此の點あまり困難でないやうで、一個師の經費僅かに三十萬元で、三百萬の軍隊費年額九千萬元に過ぎない。そして人的資源は無盡藏と云ふ程であれば、彼は今尙ほ大兵を有してゐるのであるが、現代式裝備の點に就いては不備であり、且つ急造兵丁のことなれ

ば訓練が行き屆かない。故に三百萬の軍隊を擁するとはいへ、其の戰力は頗る低下し日本軍一個大隊に對し一、二個師を持つて來ても當れない位である。故に彼は昭和十四年の攻勢失敗以來屏息して敢て出擊せず、唯例のゲリラ戰術と宣傳とを以て米英依存の惱みを續け最後の勝利を僥倖してゐるに過ぎない。

【配兵】 此の配兵問題は研究すべき價値がある。日本軍は兵力の節約上餘りに其の占據地域を廣めずに要點確保の方針を執つてゐるやうであつて、之は固より當然のことである。唯支那軍に就いて意見がある。

支那軍の配兵は殆んど一律平等に到る所の日本軍に對してバラ撒き其の重點の所在は不明である。つまり全線に亙り持久防禦の配兵振りである。之れ大いに不可なり。

然らば如何すべきか、曰く、不要不急の正面には配兵せず、(但し要すれば最小限の兵力を置く)而して何れかの重點に主力を集中すべきである。長期抗日を主眼とする蔣介石のことなれば持久作戰を執るのが一應は至當のやうであるが、しかし縱令米英依存方針を執るとしても此の持久戰法は復活更生の途ではない。又「米英依存、望みなし」と見たならば尙ほ更持久戰法は自滅の愚法である。故に蔣介石としては日本に屈服するならば格別、苟も民族英雄たるの面目を立てんとするならば事の成敗を問はず、此の際乾坤一擲の運命戰を試むべきである。然らば彼の名は眞の支那英雄の一人として史上に傳はるであらう。然るに他力依存の僥倖を夢み望みなき持久戰を續けてゐるのは彼の爲め取らざる所である。訓練足らず、裝備完たからずと雖も三百萬の大兵がある。之を北は五原の果てから南は佛印國境まで蜿蜒一千里の間にバラ撒いて、見込なき形勢を觀望するとは蔣介石の戰略としては餘りに無策なもので三百萬大兵を徒死せしむるものである。

然らば何れの方面に如何なる作戰を執るべきかと云ふのであるが、事固より乾坤一擲の大業であるから一見冒險奇拔的たるは勿論である。

を續けてゐるのは彼の爲め取らざる所である。訓練足らず、裝備完たからずと雖も三百萬の大兵がある。之を北は五原の果てから南は佛印國境まで蜿蜒一千里の間にバラ撒いて、見込なき形勢を觀望するとは蔣介石の戰略としては餘りに無策なもので三百萬大兵を徒死せしむるものである。

然らば何れの方面に如何なる作戰を執るべきかと云ふのであるが、事固より乾坤一擲の大業であるから一見冒險奇拔的たるは勿論である。

大體から云ふと北方を放棄して南支に據ると云ふ案である。そこで北方は共産軍に一任し、それに若干の助勢をなして山西省方面から京津の野を突かしめるのである。而して此の方面の後方連絡は赤色ルートを取らしめる。つまり蔣介石としては共産軍と勢力爭ひすることなく、彼を利用して日本軍に當らしめると云ふのである。

山西方面は山岳地帶の關係上、日本軍の最も苦戰掃蕩した地方で、黃河作戰、潞安作戰、中原作戰、等々仲々壯大な作戰が行はれたが、敵匪の蝟集し易い地形であり、且つ各所に共産根據地を有してゐるから共産軍に若干の兵力を加へて進攻せしめんか縱令大なる成功を見なくとも北支方面の日本軍に脅威を與へ得るであらう。

次は南方作戰である。つまり蔣介石としては今までのやうに全支の主人公たるの考へを棄て北支は共産軍に讓り中支は四川軍に任かせ、其他の主力を以て南支を確保し以て民族英雄としての活躍を此の方面に試みようと云ふのである。

之が爲めには先づ廣東を奪還することだ。海軍なき爲め沿岸全部の確保は困難ならんも要港は成るべく之を保持して英米海軍と遙かに策應するの計を爲し、後方連絡を佛印ルート、ビルマルートに取るのである。此の構想は日本軍の佛印進駐前に係るものたるに注意を要する。

中央を棄てゝも宜昌上流の峽關を抑へ四川軍を以て其の方面を守らしめたならば、日本軍の侵入を防ぎ得るであらう。又若し日本軍が河南、陝西、湖北、四川に侵入しようとも、夫れは覺悟の前で彼としては南支の地盤を確保することを第一主義とせねばならぬ。

以上の如く共産軍を別動隊として北支に活躍して日本軍を脅威し、中支方面は殆んど開放して四川省の諸要衝を固守するに止め、全力を南支に固め英米の力を背景に東北面して日本軍に飛び掛らんとするの勢ひを示したならば、それこそ日本軍に對し一敵國たるの感を與へて其の活動を牽制することも出來ると云ふものだ。勿論機を見て、蔣介石が曾つて北伐軍を起して廣東を進發した其の時の如く浙江、江西、湖南の地區から日本軍を横擊すべきである。

即ち蜿蜒一千里の間に三百萬の大兵を雛人形のやうに並べて必敗の持久戰法に其の日暮らしを偷安するよりは男子らしく發祥の地たる南支の天地に全軍を集め、此處を根據と一大決戰をなすのが、蔣介石として執るべき最良の戰略であつたであらう。

然るに彼は斯く決心することなく、北支を取られ、中支に敗れ、南支の要鎭廣東を失ひ、海南島を略せられ、遂には佛印、ビルマまでも制せられて重慶に立往生の窮境に陷つた。斯うなつては所謂四面楚歌の聲で民族英雄も古英雄項羽と同じく垓下の悲劇を見るより外はあるまい。

緒戰は大事である。蔣介石の緒戰に於ける勇氣は既に天下を呑んで日本を眼中に置かなかつた。北支の戰、上海、南京の戰が其れであつた。然るに一旦之に敗るゝや尙ほ八分の勇氣を存して徐州に戰つて見たが亦此處にも敗れた。斯うなると人間は自信力を失ひ自己を疑ふやうになるものだ。蔣介石も亦其の範疇を出でず、其の後の

も古英雄項羽と同じく垓下の悲劇を見るより外はあるまい。

緒戰は大事である。蔣介石の緒戰に於ける勇氣は既に天下を呑んで日本を眼中に置かなかつた。北支の戰、上海、南京の戰が其れであつた。然るに一旦之に敗るゝや尙ほ八分の勇氣を存して徐州に戰つて見たが亦此處にも敗れた。斯うなると人間は自信力を失ひ自己を疑ふやうになるものだ。蔣介石も亦其の範疇を出でず、其の後の大戰である武漢戰の如き、廣東戰の如き、最早緒戰の時のやうな攻勢意氣の見るべきものなく、守勢、逃げ腰的の戰ひ振りであつた。一度怖氣が付くと、負け犬の如く反轉して咬み付く勇氣が無くなるものである。

次いで彼は昭和十四年に、鳴物入れで大掛りの反擊作戰をやつたが一旦負け癖の付いた軍隊は到る所日本軍に反擊されて殲滅と云ふ悲運に陷り、蔣介石直系軍の大部も此の時に潰敗したのである。爾來攻勢の意氣全く衰へ、爆擊の焦都重慶に大ビラに牙旗をも樹て得ず、唯僅かにゲリラ戰の成果に一縷の望みを繫いでゐると云ふ哀れな有樣である。

一とたび敗れた戰勢の堤防は一寸には修覆は出來ない。さう云ふ時には何時までも執拗株守することなく愚痴觀念を一擲して、斷然新方面に活動の天地を拓開し、新たな意氣を以て邁進するのが人間心理の轉換法であつて、古來の英雄名將は皆此の手を用ひてゐる。秀吉、ナポレオンなどは此の種の名手である。然るに蔣介石が或る時機に南支に立て籠るの壯擧を斷行するの勇を缺き遂に馱羅々々坂を下つたのは彼としての失策ではなかつたか。

【海軍と空軍】 日本の海軍と空軍は、謙信麾下の猛將鬼小島の言の如く「無鳥島の蝙蝠」であつて、事變の立體戰場は我が無敵獨步の世界であつた。

我が海軍は或は海洋に或は河川に或は湖沼に海軍本然の海戰を交へて敵艦を全滅し、或は陸軍の護衞輸送、沿

岸の警戒監視、掃海啓開の作業、敵前上陸、敵船の拿捕檢索、殊に渡洋爆擊、數百千回の空襲快擧等、普通人の想像し能はざる役割、想像以上の苦難を克服して、支那沿岸を封鎖して敵の輸血路を遮蔽し、長年月の間横暴なる米英海軍に氣兼ね遠慮、隱忍しつゝ善く其の重任を果した。しかも此の苦しき期間に於て我が海軍が支那全土の海岸の有ゆる要衝を制握し島嶼、海岸を扼し得たことが、やがては其の後に來たつた大東亞戰爭に、西太平洋における皇軍必勝の戰勢を成したもので、即ち事變五年の間の營々たる努力が玆に實を結んだものと云へよう。

空軍が此の事變に如何に偉大な貢獻をなしたかは言を要せざる所である。貢獻のみにあらず、此の間に大なる試驗、體驗、改良、發明、工夫を積むの機會を飽味して世界的空軍を創建することが出來たのである。此の五年間の訓練により角力ならば十兩から横綱となり、劍士ならば精練證から師範に進み、碁ならば三段から八段に昇つたやうな躍進振りである。かのノモンハンの戰に於て千三百餘の蘇聯機を擊ち落し、大東亞戰爭になつてからは忽ちの裡に米英機約二千餘を擊墜破して全世界を震駭させたのは畢竟するに五年に亙る支那事變其のものゝお蔭であつた。

【支那事變の戰果】　戰場に遺棄せる敵の屍體實に二百三十餘萬と註せられてゐるが、之は遺屍だけの數であるから實際の死者は三百萬餘と察せられる。近代戰爭の死傷者の比は一と三で、即ち傷者は死者の三倍と見られてゐる。此の比からすれば支那軍の傷者は九百萬となる。又二倍とするも六百萬の傷者數であつて、いくら內輪に見ても死傷一千萬の多數に達してゐる。しかも彼は尙ほ三百萬の現兵を有すと云へば支那の人的資源は頗る豐富と見ねばならぬ。

ゐる。此の比からすれば支那軍の傷者は九百萬となる。又二倍とするも六百萬の傷者數であつて、いくら內輪に見ても死傷一千萬の多數に達してゐる。しかも彼は尙ほ三百萬の現兵を有すと云へば支那の人的資源は頗る豐富と見ねばならぬ。

蔣介石の最も困るのは兵士の損傷にあらずして軍器の損耗である。此の裝備の點は支那の產業力の極めて貧弱な現況からして如何ともすることが出來ない。現在支那自國に於て生產し得るものは小銃、輕機關銃、迫擊砲及びそれに附隨する彈藥程度のものであつて、其他近代戰の花形である飛行機、戰車、自動車、火砲と云ふやうなものは悉く外國から購入しなければ補給することが出來ない。連戰連敗の結果、これらの重兵器は殆んど失つてゐる。輕兵器でも一個師一萬の兵に對し小銃約三千挺しかない、したがつて三百萬の軍隊とは云へ其の戰力と云ふものは非常に低下してゐる。故に彼は大兵を擁すと云ひながら持久屛息してゐるのは、さう云ふ點もあるからであらう。

【事變處理】 蔣介石の唱道する抗戰建國論は偏狹な民族の排他的思想に胚胎してゐる論である。彼は連戰連敗して其の抗戰力が軍事的、經濟的に低下してゐるが、此の思想的抗戰力は未だ尙ほ相當强い勢力を占めてゐるやうだ。

蔣介石は米英依存政策を續けてゐたならば何時かは勝利の日も來るだらうと夢を見てゐる間は、仲々日本に向つて降伏するやうなことはあるまい。元來蔣の仲間の米にせよ英にせよ、戰爭をスポーツの如く見、負けたら手をあげればよいと寔に淡々たるものである。然るに支那人はそれとは異なり負けても負けたといつて手を擧げず何處までも執拗に喰ひ下つて來る性分の國民である。今までの歷史はそれを證明してゐる。宋の滅亡といひ、明

の滅亡といひ飽くまで抵抗を續けて、一の谷から、屋島へ、屋島から壇の浦まで行くのである。現に彼は南京から武漢へ、武漢から重慶へと落ち延びてゐるが、それを叩いたら又其の後方〳〵へと何處々々までも退き、亡國となつても、ワシントンなりロンドンなりにエチオピヤ王の如くに、佛ドゴールの如くに、亡國政府を作つて失地回復、最後の勝利を呼號するに相違ない。それで目下彼は凡ての點からして崩潰前夜の內情を知つてゐるが、自暴自棄的の抗戰を續けてゐるに過ぎない。故に我は良く其れ等のことを考慮して事變の處理を講ぜねばならぬ。

即ち軍事的には兵を進めて彼等の最後の根據地を蹂躪し、政治的には汪精衞の指導する國民政府を强化し、經濟的には現在の封鎖を益々嚴密にし且つ國民政府治下に於ける經濟建設を活潑に誘導し、思想的には日本の八紘爲宇の大精神を顯揚し、孫中山の大亞細亞主義及び汪精衞の和平反共の思想を徹底せしめ、そして重慶をして反省悔悟、以て亞細亞に還らしめねばならぬ。

しかし此の政治的、經濟的、思想的の諸工作は現情勢に於ては何れも强大なる武力の支援を得て始めて效果が擧るのである。換言すれば第一に武力、第二に武力、第三に武力である。大東亞戰爭勃發を契機として彼等の心境に一大變化のあるべきに、依然として對日抗戰五年の民族英雄蔣介石は、其の迷ひの夢尙ほ未だ醒めないやうである。醒めずんば善し、醒めるまで說き且つ叩き、打ち且つ敎へ、そして八紘爲宇の旗の靡く皇國の陣營に彼及び彼等を歸服せしめねばならぬ。其の處理の終るまで我等は自重奮鬪すべきである。

事變處理の一法として俠道を檢討して見る。此の處理は蔣介石さへ折れゝば大體の片が附くのである。民族英

である。醒めずんば善し、醒めるまで說き且つ叩き、打ち且つ敎へ、そして八紘爲宇の旗の靡く皇國の陣營に彼及び彼等を歸服せしめねばならぬ。其の處理の終るまで我等は自重奮鬪すべきである。

事變處理の一法として俠道を檢討して見る。此の處理は蔣介石さへ折れゝば大體の片が附くのである。民族英雄と稱へられる彼は萬更の沒曉漢ではあるまい。人一倍理智に長け祖國愛の士でもあらう。そして今となつては自己の政策の間違つてゐたこと、前途の望みのないことも承知であるに相違ない。曾つて日本に留學したこともあり、彼等の革命に助力した日本の厚情に感謝の一念を持つてゐることでもあらう。されど今の所、是れまでの行き掛り上、君子豹變して日本と握手する譯にも行かず、汪兆銘との關係上抗日政策を放棄する義理合でもなし、彼としては表面では虛勢を張つて强がりを言つてゐるが、內心では何んとかして彼の面目の立つやうに此の事變を處理したいと念願してゐるだらうとは强ち一片の想像ではなからうと思ふ。それで玆に一案があると云ふのである。

それは誰か一人飛び込んで行つて蔣介石と直談判をすると云ふのだ。生命がけの談判である。西鄉南洲が日韓問題の時、自分が獨り朝鮮に使して直談判をしようと提言した、其の流儀の談判である。武力や普通一般の外交や、第三者の停調で纏まりが附かず、紛糾してこぢれたものが此の直談判により案外容易に解決されることがある。其の著例として秀吉を擧げて見る。

秀吉は此の種の名手であつて他の追從を許さない天分を持つてゐたことは云ふまでもないが。其の一、二の例を述べて見ると、賤ケ嶽の戰に於て、彼の軍は當時柴田方に附いてゐた前田利家の居城府中を攻めることゝなつた。此の時秀吉唯一騎戰線を飛び出して城濠の橋門に至り大音聲に「オーイ、又左(マタザ)。オーイ又左、秀吉が來たぞ

門を明けろ」と連呼した。又左とは利家の幼名である。城兵之を狙撃すれば一發必殺の間合である。利家城樓にありて之を見、部下に令して射撃を止め城内に案内せしめた。

秀吉は例の皇室中心主義を説きて歸順すべきを勸告し、我が身の活殺を敵に任かせ肝膽を碎きて赤心を吐露した。利家其の熱誠に打たれ涙を流して相抱擁して和し、共に〳〵柴田を成敗したのであつた。即ち矢石兵戈の間に城の爭奪されべきを主將一人の直談判によつて平和に解決したのである。

又其の以前に秀吉が中國征伐の途上、謀叛を起した攝津伊丹の城主荒木村重の城門へ唯一騎進み出て村重に面會を求めた。此の時も城兵が樓上から射撃せんとしたのを村重之を制止して城内に引き入れ、兩雄の會談となつたが、秀吉は我れを棄てゝ例の大義を説き村重を感激させた。しかし村重は信長に含む所あり秀吉の忠言を容れる譯に行かなかつたが、秀吉の熱誠に感じ、禮を厚うして安全に送り還したことは歷史の美談として傳へられる所である。尙ほ秀吉は北伐の時越後に進入し、單騎上杉景勝と會談して成功した例もある。

以上は秀吉に就いての例であるが、一體日本人には此のやうな冒險的劇事を好む趣味がある。之は即ち男らしい性分で、隨つて俠客が現はれ俠客精神が歡迎嘆美される所以である。かの幡隨院長兵衛が唯一人旗本川合邸へ乘り込み泰然として俎上の犧牲となつた。其の種の魂が日本人の誰もが持つて居るやうである。かう云ふことは東洋人殊に日本人の間にはよくあるが、西洋人の間には餘り見えないのである。故に此の魂を以て一つ蔣介石にぶつかつて見ようと云ふのである。

秀吉の前田を訪ねた精神を以て蔣介石を訪ね、西鄕、勝兩雄の會談の如くに兩者の會見とならば、案外容易に

東洋人殊に日本人の間にはよくあるが、西洋人の間には餘り見えないのである。故に此の魂を以て一つ蔣介石にぶつかつて見ようと云ふのである。

秀吉の前田を訪ねた精神を以て蔣介石を訪ね、西郷、勝兩雄の會談の如くに兩者の會見とならば、案外容易に事變處理の光の一端を發見し得るかも知れぬ。

勿論有力なる日本代表の一雄が單騎乘り込み微塵の私心を挾まず、神人一如の赤心を敵の胸中に置き、皇國の理想とする八紘爲宇の大精神を說き、東亞共榮共存の大理法を語り、蔣介石の持つ人間性に訴へたならば、いくら迷夢に彷徨してゐる彼でも玆に一番悟るに至るであらう。至誠天地を動かす。人生意氣に感ず。聞く蔣氏は本質誠の士、涙の人たると。誰かある、彼を前田利家たらしめる。「今秀吉」の一雄を望むや切。

支那事變主要事項概覽

自昭和十二年七月七日
至同十六年十二月三十一日

年	月日	主要事項
昭和十二年（皇紀二五九七）（西暦一九三七）	七月七日	夜十一時四十分盧溝橋事件勃發
	八日	日支軍交戰、日軍龍王廟占據
	一一日	帝國閣議、北支派兵に決し聲明を發す
	二五日	香月中將支那駐屯軍司令官
	二六日	郎坊事件起る
	二八日	廣安門事件起る
	二九日	第二十九軍膺懲戰開始
		天津附近に戰鬪起る
		通州事件起る
	八月八日	日本軍北京入城
	九日	上海に大山大尉事件起る
	一一日	京綏線南口攻擊開始
	一三日	上海にて日本陸戰隊交戰
	二〇日	京漢線良鄕附近の戰
	二三日	日本陸軍上海敵前上陸
		居庸關占據

昭和十二年（2597 / 1937）

八月二五日	支那沿岸の一部航行遮斷宣言
二七日	張家口
二八日	宣化
三一日	羅店鎭
	吳淞鎭
	占據
九月一日	獅子林砲臺
二日	吳淞砲臺
六日	寶山鎭
一一日	馬廠
一二日	揚行鎭
一三日	大同
一五日	上海方面松井大將、北支方面寺內大將最高指揮官
一八日	涿州占據
一九日	南京爆擊三十二機擊碎
二一日	廣東爆擊十九機擊碎
二二日	太原爆擊七機擊碎
二四日	平地泉
	保定
	滄州
	雁門關
	占據
二九日	日本陸軍上海敵前上陸
	居庸關占據

昭和十二年（2597 / 1937）

三〇日	百靈廟占據
一〇月三日	德州
一〇日	石家莊
一四日	綏遠
一五日	順德
一七日	包頭
一八日	邯鄲
一三日	漢口爆擊二十九機擊碎
一五日	上海總攻擊
二六日	廊行鎮
三〇日	娘子關
三一日	江灣鎮
	大場鎮
	占據
	太原爆擊十五機擊碎
	上海蘇州河渡河
一一月三日	忻口鎮占據
四日	彰德占據
五日	杭州灣上陸
六日	日獨伊防共協定成立

昭和十二年（2597 / 1937）

一一月九日	太原占據
一二日	松江占據
一三日	上海完全占據
一四日	嘉定・太倉・崑山・鵲山　占據
一五日	
一六日	支那政府重慶に移轉
一九日	威縣・蘇州・常熟　占據
二〇日	大本營設置せらる
二四日	湖州・宜興・廣德　占據
二八日	
三〇日	
一二月二日	蘭州爆擊二十機擊碎
七日	蔣介石南京脫出
八日	鎭江占據
一〇日	南京總攻擊開始
	蕪湖占據
五日	杭州灣上陸
六日	日獨伊防共協定成立

昭和十二年		
一三日	南京攻略	
一四日	北京に臨時政府成立	
一七日	南京入城式	
二〇日	滁州占據	
二二日	蘭州爆擊十七機擊碎	
二四日	杭州	占據
二七日	濟南	占據
三〇日	博山	占據

昭和十三年		
一月一日	泰安	占據
四日	曲阜	占據
一一日	濟寧	占據
一六日	日本は國民政府を相手にせずと聲明	
二〇日	北支最高指揮官寺內大將北京に移駐す	
二月二日	蚌埠占據	
三日	芝罘占據	
一一日	黃河作戰開始(二一—三月)	
二三日	畑大將中支方面最高指揮官	
二五日	南昌爆擊三十七機擊碎	
二六日	澤州占據	

昭和十三年（2598 / 1938）

二月二七日	臨汾占據
三月八日	襄陽爆擊二十二機擊碎
一三日	獨墺合邦成る
二五日	歸德爆擊十四機擊碎
二八日	維新政府南京に成立
四月三日	臺兒莊占據
一〇日	歸德爆擊二十四機擊碎
一三日	從化方面爆擊十五機擊碎
二〇日	沂州占據
二九日	漢口爆擊五十一機擊碎
五月九日	蒙城占據
一〇日	厦門島に敵前上陸
一四日	隴海線遮斷
一八日	徐州總攻擊開始
一九日	徐州攻略
二四日	蘭封占據
二八日	歸德攻略
六月一一日	開封占據

昭和十三年（2598 / 1938）

三日	板垣中將陸軍大臣
九日	武漢攻略戰開始
一三日	安慶占據
一七日	支那軍黃河を破壞す
二六日	潛山攻略
二七日	南昌爆擊十八機擊碎
	南昌再爆擊十五機擊碎
七月四日	湖口占據
	南昌爆擊四十五機擊碎
一二日	蘇聯兵越境張鼓峰を占領す
二六日	九江占據
三一日	越境の蘇聯兵を擊退す
八月三日	漢口爆擊三十九機擊碎
一〇日	日蘇停戰協定成立
一三日	鄭州爆擊二十機擊碎
一七日	蒲州占據
一八日	衡陽、寶慶爆擊四十一機擊碎
二一日	星子占據
二四日	瑞昌占據

昭和十三年（2598 / 1938）

八月二八日	六安
二九日	霍山
三〇日	獨山鎭
三一日	南雄爆擊十七機擊碎
	占據
九月三日	馬廻嶺攻略
六日	廣濟占據
七日	塘沽上陸
一一日	富金山
一六日	商城
一七日	光州
二〇日	武穴鎭
二一日	光山占據
二八日	羅山占據
二九日	昆明爆擊二十機擊碎
	田家鎭攻略
	攻略
一〇月二日	木石港
四日	半壁山
五日	箬溪
八日	蘄春
	占據
二一日	星子占據
二四日	瑞昌占據

昭和十三年（2598 / 1938）

一月	
九日	隘口街占據
一〇日	獨軍ズデーテン地區占領
一二日	皇軍バイヤス灣上陸
一六日	信陽攻略
一八日	石灰窰
一九日	陽新
二〇日	黃石港
二一日	增城
二二日	大冶鐵山
二三日	黃州
二四日	廣東
二七日	珠江遡江作戰開始
	鄂城
	團風
	新州
	黃坡
	華容鎭
	應山
	虎門要塞
	武漢三鎭攻略

（占據）

昭和十三年（2598 1938）	
一〇月二七日	虎門要塞
二七日	武漢三鎮攻略
二八日	德安
二九日	安陸
三〇日	咸寧
三一日	孝感
一一月一日	應城
三日	漢川
四日	占據
五日	永修
六日	浙河市
一〇日	皂市
一一日	通山
一八日	宋河鎮
一二月九日	崇陽
一八日	通城
一月三日	岳州
五日	占據
	南支最高指揮官古莊大將の後任安藤中將
	北支最高指揮官杉山大將
	汪精衞重慶脫出
	中支方面最高指揮官山田中將
	平沼內閣成立